

琉球大学学術リポジトリ

第1回琉球大学びぶりお文学賞受賞作品集「発掘された琉大文学の水脈」

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学 公開日: 2015-03-15 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 琉球大学附属図書館編 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/30474

発掘された琉大文学の水脈

第1回 琉球大学 びぶりの文学賞 受賞作品集

あおい海の目で 山原みどり

コルネリアの幽霊屋敷
名付け
窓虎魚、猫人間

大谷 凛
村上 陽子
砂川 祐樹

第1回琉球大学
びぶりの文学賞
受賞作品集

琉球大学附属図書館報「びぶりの」特別号



2007年度

琉球大学附属図書館報「びぶりお」特別号

発掘された琉大文学の水脈

第一回琉球大学びぶりお文学賞受賞作品集

第一回琉球大学びぶりお文学賞受賞作 目次

受賞作

あおい海の目で

山原 みどり 5

(法文学部・国際言語文化学科三年)

佳作

コルネリアの幽霊屋敷

大谷 凜 37

(法文学部・人間科学科二年)

佳作

名付け

村上 陽子 75

(人文社会科学研究科国際言語文化専攻二年)

佳作

窓虎魚、猫人間

砂川 祐樹 111

(工学部・情報工学科四年)

仲程昌徳 「期待される新人たち——「びぶりお文学賞」講評——」

山里勝己 「びぶりお文学賞講評」

村上呂里 「第一回目の審査を終えて」

選考経過

150

琉球大学びぶりお文学賞は、琉球大学が基本目標として掲げる「地域及び広く社会に貢献する人材」「意欲と自己実現力を有する人材」育成の一環として、言語力（読む力、書く力）を向上させ、想像力、表現力、創造力豊かな学生を育成するとともに、文学の啓蒙活動を高め、地域社会における文学・文化活動のリーダーを輩出することを目的に琉球大学に在学する学生を対象に平成十九年度に設けられました。

装
幀
上
村
豊

琉球大学びぶりお文学賞 受賞作

あおい海の目で

山原

みどり

大学三年の夏休み、約一年半ぶりに帰省したときのことである。団地のおじさんの目が青くなっていた。

「おじさん、その目どうしたの」

久しぶりの帰郷なのだから昼食の残りを渡しながら顔でも見せてきてはと母に言われ、おじさんを訪ねた私は再会の挨拶もなしに驚きの声をあげていた。

「長年海に潜ってきたからね。そろそろ目が海の色になってきたっておかしくはないだろ。それより、元気そうだなあ。魚たくさん捕ってきたからね、もらっていくといいよ」
おじさんはそう言うのにこりと笑った。昔からそうだ。おじさんはいつでも本当に心から、にこり、と笑う。しかし、四十年近くも巣潜りの漁をしてきた結果、太陽の熱と光にさらされ続け赤茶けた白髪頭と、生まれ持ったすつと形のいい鼻、彫りの深い顔立ち、それにくわえて青い目である。いつものその笑顔もとても純粋な日本人には見えなくなっていた。

暑い夏だった。もう昼も遅く、団地から家までは歩いて五分程度の道のりなのだが、照りつける太陽に、左手に持ったビニール袋の大量の魚の重みが手伝って首筋や背中を汗が伝っているのが感じられた。風はそよとも吹いていなかった。視界は白くかすんでいた。むわりと滞った空気と、ほこりに潮の混じったようなにおいに窒息しそうになりながら家までの道のりを思うと何か不安のような焦りのようなものを感じた。無事にたどり着けるだろうか、と。たった五分の道のりなのに。手がじつとりと汗ばんでいた。

生まれ故郷の小さな島はもともと活気のあるところではなかったが、久しぶりに帰ってくるというさう寂れた感じがした。九月に入り、昼間子供たちの姿が見えないせいもあつたかもしれない。団地の入り口と道路をはさんで向かい合つた畑のサトウキビは元気がなくうなだれていたし、最後に帰ってきた時にはまだやっていたはずの小さな商店のシャッターは降ろされていた。いつも店先の日陰に座って外を眺めていたお店のおばあさんはどうしたのだろう。そんなことを考えながら窓の開け放たれたコンクリート造りの、あるいは木造の家々と団地の敷地にはさまれたアスファルトの道を歩いていく。古い団地だ。二階建ての一棟一棟に四世帯ずつ入るようになっていて、一・二階を合わせて一住居という造りになっている。剥き出しのコンクリートが伸びすぎた芝生の上にとだドミノのように一列に十棟ほど並んでいて、海から吹き上げてくる潮風にやられてどの棟のベランダの柵も錆付いていた。

昼間だというのに恐ろしく静かだった。車どころか人も通らない。アスファルトは熱く、家々の前に停められた車の影や玄関先で野良犬がだらりと寝ていた。まるで死んでいるみたいに。滞っているのは空気だけではなかった。

団地の中にある草がぼうぼうと伸び放題になった空き地に差し掛かった。元は公園だった場所だ。唯一の遊具であるクジラの滑り台は水色のペンキがはげ、草が絡みついていく。ここで遊ぶ子供は誰もいない。ただ、色のはげたクジラだけが雑草の海に音もなく浮かんでじつと暑さに耐えている。アスファルトに反射する太陽の光がまぶしくて、クジラの向こうに視線を移すと本物の海が目に入ったが、こちらも太陽の光を受けてざらざらとまぶしく光を放っていた。魚が腐らないようにとおじさんが入れてくれた氷が溶け、ビニール袋から滴がぼたぼたと足にしたたりおちた。私はあわてて足を速めた。

「これ、おじさんが」

ぼたぼたと水のたれるビニール袋の魚を見せると母はあわてて新聞紙を持ってきて袋の下にあてがい、魚を流し台へ持っていった。

「おいしそう。今日の夜、庭で焼こうか」

母が言った。ペットボトルからごくごくと音を立てて一気に水を飲み、んー、と曖昧な返事をして部屋に引っ込んだ。食べ物の話はしなくなかった。

二時間ほど部屋で勉強した後、海へでも行ってみようと思った。父の帰宅にあわせてそろそろ母が夕食の支度をはじめ。さすがにこの時間になると日も和らいでくる。海風は少し冷えるかもしれない。私は薄手の長袖シャツを羽織り、サンダルを突っかける。と、台所の母と祖母に「ちよつと出てくる」と声をかけて家を出た。「どこに？もうすぐご飯だよ！」という声には知らん振りをした。外はもう夕方の空だった。

海までは急な坂道を降りていく。代わり映えのしない風景が続く。コンクリート造りの家、古い小さなスーパー、墓地。相変わらず灰色の島だな、と思う。夕食準備時ということもあり、車や人の姿もあった。道路沿いに墓地のある高台をぐるっと回る坂道を下りていくと視界が開けて海が一望できるところに出る。坂を下りきって少し行くと漁船の停泊所についた。防波堤の上に立ち、海を眺める。もう辺りは薄暗くなっていた。このくらいの時間帯の海は物思いに沈む振りをするのにちょうどいい。

いつからだろう。まともに食事ができなくなっただのは。

故郷に帰れば何か現状に変化があるかもしれないと思い、久しぶりに帰ることにした。隣の島の飛行場まで迎えに来てくれた母は一年半ぶりに会う娘の姿を見て呆然としていた。無理もない。最後に帰郷したときから計算すると十五キロは痩せていたのだ。父や祖父も同じような反応を示し、みな一様にちゃんと食べているのかと尋ね、食事時に

なるともつと食べるもつと食べるよとばかり言つては私をいらいらさせた。高校生でもあるまいし、家族の前では適当に食べるようなそぶりを見せて心配をかけないようにする位の仕事ができていいだろうと自分でも思うのだが、とてもそんな余裕はなかった。いや、むしろもう高校生ではないからかもしれない。毎日が焦りの日々だった。自分のしていることが果たしてこれで良いのかどうか、全く自信がなかった。ひよつとすると時間を無駄にしているだけなのではないか。かつては無限とも思われた時間はいくらあつても足りないように思えた。そうなると何も手につかなくなることがしばしばあり、余計に焦りが積もつていくのだった。食べ物はまだでさえ余裕のない心の隙間に入り込み、私はいつか窒息してしまうのではないかという気さえしていた。

海は昼間のまぶしい輝きを失い、静かに波打っていた。夜の海は黒い。ふとおじさんの青い目を思い出した。今ごろはおじさんの目も黒々としているのだろうか。少しからだが冷えてきた。風はまだねっとりとしていたが、夜には少し秋の気配も混じっているのかもしれない。本当に物思いに沈んでいたことに気がつき、少しうれしくなったが、すぐにそんな自分に嫌気がさした。帰ろう。今日はまだ何にもしていない。

「ほんとに何なんだろうねえ」

新聞紙いっぱいにざつとあけた大量のもやしの根っこを、ぽきんぽきんと取り除いて

いた母は表情を曇らせた。夏休みの日の午前中。今日も暑い。

「半年くらい前からかな。会うたびにどんどん青くなっていってみたいなんだよ。何回も病院に連れて行こうとしたんだけど絶対いうこと聞いてくれなくてね」

「でもおじさん大丈夫だって言ってたよ」

私もモヤシに手を伸ばす。

ぼきん。

私はこの音と感覚が好きだ。とても爽やかで、きつぱりとしていて。

「あの人は自分のことだとなんだって『大丈夫』で済ましちゃうんだよ。それに医者でもないんだよ。大丈夫たって何が大丈夫なんだい」

ぼきんぼきん。

「でも、おじさんが大丈夫って言うなら大丈夫な気がするけど」

「あんたはすぐにおじさんの言うこと真に受けるから。それとも思いやりって言うものがないのかねえ。見えなくなりでもしたらどうしようとか思わないのかい」

ぼきんぼきんぼきん。

「でも変わらずにちゃんと見えているんでしょう？」

ぼきん。

「そりゃあ、海に潜りに行ってるくらいだからそうなんだろうけど」

「やっぱりただ海の色が映っただけなんじゃない？おじさんそう言っていたよ」

「ああもう、ほんとにあんたは」

ぼきんぼきんぼきんぼきん。

母はため息をついたが手では休むことなく、ぼきんぼきんと軽快な音を立ててもやしの根っこを折っていた。

団地のおじさんは島の人から頭がおかしいのだと思われていた。正確には頭がおかしくなつたのだ、と。

まだ二十代の頃に島の中学校に英語の先生として赴任してきた。海が好きで、都会から自ら希望してやってきたのだ、と赴任式のときに話していたそうだ。小さな、海以外は何もない島のことだからそういう人物の噂が人々の興味を大いにそそつたのは当然の事だが、その上その人物が子連れで、しかも奥さんはいないらしいとなると尚更だった。

しかしおじさんは、島の人たちの好奇心に満ちた視線とさまざまな噂話を気にとめる様子もなく、かといつてすました態度で島人たちとの間に壁を作るでもなく、器用にも、ただ英語教師として、そして島の住人としてごく普通に毎日を過ごしていた。海が本当に好きで、休みの日には子供をつれて砂浜や港に出かけてはそこで泳いだり、流木や貝殻を拾い集めている姿が見られた。おじさんのつれてきた男の子は実の息子ではないの

だとか、実は生徒との間にできてしまった子で、それでおじさんはこんな僻地にまで飛ばされたのだとか言う噂もあったが、おじさんはその子を心からかわいがっていたようだ。そのうちに噂話も好奇の目もなくなっていたのだった。

そんな矢先の事だった。赴任から数カ月後、事件が起こった。そろそろ夏休みに入ろうかという七月のある日のことだった。おじさんの連れてきた男の子が亡くなってしまったのだ。まだ五歳にもなっていないかった。事故だったらしい。月夜の晩、海のことだった。不思議なことに詳しい話は誰も聞かされていない。この事が再び島人の想像力を掻きたてたの言うまでもない。

その時からおじさんは「おかしくなった」。事故後しばらくしてからおじさんは職場に復帰したが、それはとてもまともな授業とは言いがたいものだった。授業中に何の前触れもなく黙り込み、うつろな目で一点を見つめ、かすかに体を揺らしながらその場から動かなくなったりした。呼吸に混じってかすれた声で何か聞き取れない言葉を繰り返しているようだったが、生徒たちの声はまるで届いていないようだった。また、ひとつの英単語を黒板に何度も書き直すことがあった。ひどい時には書いては消し、書いては消しという作業を延々と続けるおじさんに恐怖を感じた生徒たちが隣のクラスの先生を呼びに行き、その先生に止められるまで一心不乱に書き直し続けていたのだそうだ。そうなるともはや教師の職など続けられるはずがない。おじさんは職を失い、当然

故郷に帰るものだと思われた。しかし、おじさんはそれ以来ずっとこの島に住み続けている。何らかの形で親なり兄弟なり親戚なりに話に行っていたはずである。しかし誰もおじさんを迎えにくる様子はなかった。このことについてもさまざま噂が飛び交った。なぜ夜に小さな子供をつれて海になんか。ひよつとしてあの人が自分で殺してしまったのではないか。が、それも徐々に島の退屈な日常の中に埋もれていった。はじめのうちはおじさんのことを心配してか、それとも好奇心からか、同情からか、恐る恐るながらも食事をおすそ分けしたり、たまに訪ねていたりする人々もわずかながらあった。しかしながら、それもおじさんが巣潜りの漁をして魚を捕り、それを食べたり売ったりして生活するようになってからは徐々になくなっていったのだ。このことでおじさんと島人との交流はほとんどなくなり、おじさんは島の中で「頭のおかしい人」ということになったということだ。子供たちは物心ついたときからおじさんは頭のおかしいのだと「わかって」いて、団地の中でもおじさんの家の周りには絶対に近寄らない。私も例外ではなかった。あの五十円事件がなければ今でもそうしていただろう。

小学校二年生の夏休みに団地に住む友達数人と遊んでいた時のことだ。鬼ごっこやかくれんぼに飽きた私たちは怪談話をしようということになった。誰の口からも、島の子供なら誰でも結末を知っているような言い古された話しか出てこなかったが子供の私た

ちにとつては、それはそれで構わなかった。夏休み、友達と、どこかの日陰に入つて（私たちの場合、そこは団地の一棟ずつに備え付けられた、コンクリート造りの薄暗い、ちいさな倉庫の中と決まっていた。）輪になつてうずくまり、ひそひそと話される怖い話。今でもあの時の、お尻の下のひんやりとしてほこりっぽいコンクリートの床の感触ははつきりと覚えている。たとえそこで話されるものが皆の知っている、ありきたりな話だったとしても、その状況は私たちの気持ちを奇妙に高揚させるには十分すぎるほどの効力を持つていたのだ。しかしその時は何か違つていた。いつもの怪談話に飽き足らなかつた私たちは倉庫の外の照りつける太陽とうるさい蝉の声に、残された夏休みの長い一日を思い絶望して黙りこくつた。その時、友達の一人が提案したのだ。おじさんの家を覗きに行こうと。しばらくの表面的な反対の後、私たちはおじさんの住む棟へと向かつた。

おじさんの家は扉も窓も開け放たれていた。中の様子は丸見えだったが、おじさんの姿は見当たらなかつた。一階の部屋と台所には必要最低限の物しか置いておらず、わりあい清潔にされていた。左手の部屋の壁には部屋の大きさに見合わない大きな本棚が置いてあつて本がびっしりと並んでいた。台所の流し台の蛇口から水が漏れていて、それがシンクにあたつてはとんとんとと音を立てていた。私たちは誰も口を聞かなかつた。そばにいた友達の息遣いがはあはあと聞こえた。首筋を汗が伝つて流れた。

「誰もいないね」

そのうち誰かが言い、わたしは

「帰ろう」

と言つて急いで引き返そうと来た方向へ向きを変えた。

心臓が跳ね上がったようだった。すぐ後ろにおじさんが立っていた。

整つた形の主張しすぎない鼻、薄く、両端のかすかに上がった唇、小柄な体には少し大き目のシャツに、一昔前に流行つたような細身のブルージーンズ。そして、ぼさぼさの前髪の下の長いまつげに縁取られた下がり気味の目。言いようのない恐怖に襲われながらも、不思議なことに、わたしは初めて間近で見えるおじさんをどこか冷静に観察していた。そして、当時もう四十代半ばを過ぎていただろうに、男の子みたい、と思つたのだつた。

「君たち」

無表情で私の目をじつと覗き込んでいたおじさんはふいに言った。

「これあげるからもう帰りなさい」

おじさんは私の手をとり、何かをその中に押し込んだ。そして「にやり」と笑つた。

二人の友達はわあつと言つて駆け出した。わたしはあまりの事にそのままそこに立ちすくみ、逃げ遅れてしまったのだが、おじさんはそんな私を残してそのまま部屋へ入つて

いった。後で手のひらの中を覗くとそこには五十円玉が一枚、汗でびしょびしょになっていた。

「返してきなさい」

自分ひとりでは頭の中の混乱を沈めることができず、事の次第を全て話したわたしに母は言った。

「家を勝手に覗いてその上お金までもらってくるなんていったい何を考えているの！」

「頭のおかしい人」の家に近づいたことではなく、他人の家を覗き、その人からお金をもらってそのまま帰ってきたことで、母は私を非難した。そういう人なのだ。「他人に迷惑をかけてはいけない」と言うのが父と母の口癖だった。テストでどんなに悪い点数をとつても苦笑いをして許してくれたのに、そのしつけからはみ出すようなことをするとひどくしかられた。

私は呆然とした。

「いやだよ」

「いやでも何でも行つてきなさい！今すぐ！返してくるまで家に入れないからね」

無情にも母は私を玄関の外へ追いやり、泣きそうになっているわが子をそのままにドアをびしょりと閉めてしまった。私は大声で泣きわめき、中に入れてくれるように何度

も叫んだがドアの開く気配はなかった。母が本気なのは明らかだった。

しばらく後、私はあきらめて泣きじやくりながら団地のほうへと向かった。

おじさんはすぐに二階から降りてきた。

私は体をこわばらせ、震える声でやつと言った。

「これ。お母さんが返してきなさいって」

おじさんは少し驚いたようだったが、すぐににこりと笑って言った。

「そうか。おじさんなんかからお金をもらったりしたからお母さんにしかられたんだね。すまなかつたね」

そうして私の頭をぼんぼんとたたいた。思いがけず優しい声だった。ずっと気持ちがいっぱい詰めていた私はわあつとなつて再び泣きじやくつた。

それが私とおじさんが親しくなるきっかけだった。

私にしてみればおじさんは頭がおかしいとはとても思えなかった。おじさんは若いときに留学していたイギリスの話をしてくれたし、英語を教えてくださいました。また、海の中でサメに遭遇したときの事を話してくれたり、砂浜から拾ってきた貝殻やその辺の木の枝を使って描いた絵を見せてくれた。おじさんの話は面白かったし、絵はともきれいだっ

た。おじさんの目は、どういうわけか本当に（そう見える、とかではなく実際に）、きらきらしていて「男の子みたい」だった。私はおじさんと過ごす時間が大好きだった。はじめはあまりいい顔をしなかった母も、五十円事件に引け目を感じてか、おじさんのことをあからさまに悪くは言わなかったし、そのうち「お世話になってるようだから」と言つて食事の残りを持つておじさんに挨拶に行くようにもなった。今思えば、やはり子供のことを案じて様子を見に行くことが一番の目的だったのだろうか。その「お礼」を兼ねての訪問が何度か続くうちにおじさんの礼儀正しさやまじめながらも気さくな人柄は母の信頼を得るようになっていった。そういう私たち親子に非難の目を向ける人の中にはいたが、母は世間体よりも礼儀を重んじた。その姿勢は「頭がおかしい」といわれている人に対しても変わることはなかったのだ。

小さな島の中だけで育つた私にとって、遠い異国に住んだことがあり、その国の言葉話し、しかも手先が器用なおじさんは、何でも出来て、何でも知つていてくれる人でおじさんの言うことはすべて正しいんだと心の底から信じていた。遠足の前の日にはわざわざ明日の天気を聞きに行ったほどだ。

と言つても、おじさんを尊敬の対象とか神様のような存在としてみていたわけではない。いろいろなことを知つている大人が、子供に対してよくするようない、しつけどとか助言の類をおじさんが絶対にしなかったという事がそうさせたのかもしれない。それに

何より、その顔立ちや体つきはそういう対象として見るにはあまりにも少年のようだったのだ。尊敬の対象でも神様でもない。おじさんは私にとつて「おじさん」だった。少し大きくなって、訪ねて行く頻度も少なくなり、いくらおじさんだって完璧なわけじゃないんだから、と思うようになって、心のどこか、深い深いところでは絶対的におじさんを信用していた。だから、目が青くなってもおじさんが大丈夫だというのだから大丈夫なのだろう。そう思っていたのだが、母の悲観的な態度にあてられて不安になってきたのだろうか。胸の奥がざわざわと騒がしくなった。ますます食欲がなくなるのを感じながらもやしをぼきぼきと折り続けた。この野菜はなんて芯の強そうな音を立てるんだろう。

「おじさん、病院行かなくてほんとに大丈夫？」
「ん？」

次の日、なんとなく落ち着かず、勉強も手につかなくなった私はおじさんを訪ねたのだったが、おじさんは相変わらず自分の目の事を心配している様子は全くなかった。

「目だよ、目」

「ああ。なんだ目のこと」

などと言って返すほどだった。

「お母さんが何か言ってたんだね。何も心配することはないよ。ほら、今日もこんなに見事に魚をついてきたよ」

そう言つて台所の流しからビニール袋いっぱいのカワハギを持ってきた。そして、

「見てごらん。モリの跡、全部ほとんど同じ場所だろう」

と芝居がかった調子で威張つて見せた。袋の中を覗き込むと、本当に、どの魚もみんなほとんど同じ場所、左のほうの目の端三センチ程の個所にだけ傷がついていた。

「うわ、すごい」

「だろう。お母さんが何を心配しているのか大体予想はつくけど、この目、ほんとに良く見えるんだよ。いろんなものがね」

心なしかおじさんは興奮しているように見えた。珍しいことだ。

「いろんなもの？なに、それ」

驚いて聞いてみると

「いや、だから魚なんかがさ」

と言つて縁側に座つていた私の横に腰をおろし、海のほうを向いて短い鼻歌を口ずさんだ。

怪訝な顔をしていると、

「これ持つてつて見せればお母さんも安心するだろう」

と、例のにこり顔をこちらに向けた。あご下のそり残された髭には白いものが混じっていた。

「またこんなにたくさん！ありがたいけどもって帰るの大変なんだよ〜」

悪気なくそういった私におじさんは、ははは、と笑い声を上げた。何かはぐらかされたような気もしたが、それよりも、ほっとした。心配事など全て吹き飛ばしてくれるような笑い声だった。ははは。実際には何も吹き飛ばしてなどいなかったのに。

その日の夜、私はいつものようにテレビを見ながら夕食を摂っていた。我が家では一家揃って食事をするというわけではない。夕方になると早いもの順でシャワーを浴び、その後各自好きなきときに食べるのだ。シャワーの後すぐには食べなかつたり、シャワーを待てないほどお腹が空いたりする時などは誰かと一緒に食べることもあるが、全員が揃うまで待つということはしない。その夜は私一人だった。祖父母は揃って出かけていたし、母は台所で何かしていた。風呂場から聞こえてくる音でそろそろ父がシャワーを終えて出てくる頃だということが分かった。

納豆と、それから若芽と豆腐のお味噌汁。これで十分だ。完璧な夕食。まず納豆を一口食べ、それからお味噌汁をすすす。温かくて、おいしい。母は料理が上手だ。かつおのダシ、お味噌の加減、お豆腐の大きさ、全てが完璧なように思えた。その完璧な豆や

若芽やお豆腐が間違っても「心の隙間」に入り込まないように、慎重に、ゆっくり食べる。そのうちに父が風呂場から出てきた。まっすぐ台所に行き、母と何か話しながらお皿にご飯をよそったり、お味噌汁を注いだりしている。ちらりとこちらのほうを見たのを感じて、私は少しだけ食べるのを速めた。何か言われる前に食べ終えてさっさと片付けてしまおう。しかし父は食事ののった器を両手にすぐに居間に入ってきた。そして無言のままに私の前に大きな魚の煮付けと山と盛られたごはんのお椀を置いたのだった。私は一気に冷静さを失い、動揺し、半ばいらつきながら、それを示すようなぶつきらばうな方法で「なに」と言った。

「ちゃんと食べなさい」

物静かで優しい父の、いつもの声とはかけ離れていた。断固としていて、絶対ゆずらないぞという何かを含んでいた。それでも私も負けるわけにはいかなかった。

「夕方おじさんのところで食べ過ぎたんだってば。あんまりお腹空いてないから今日はこれでいいの！」

とりあえず嘘をついてその場をやり過ごそうと思ったのだ。しかしその日の父はごまかされなかった。

「おまえ、毎日毎日そんなことばかり言ってほとんどちゃんと食事してるのを見たことがないよ。ちゃんと食べてるならそんなに痩せてるわけがないだろ。しっかり食べな

いと何もできないぞ」

何を言っているんだろう。その逆だ。食べ過ぎると息すらできなくなるのに。何も分かってない。もう、自分を抑えられなくなっていた。

「ちゃんと食べてるって言うてるでしょう！もう、これ以上食べたら苦しくてその方が何もできなくなるよ、しかもこんなにたくさん要らないよ。絶対食べない！」

私は魚のお皿を半ば投げつけるようにして父に放って返した。カッとなりながらも、良心が働いたのか魚がお皿から飛び出さないように注意したつもりだったが、それよりもお皿からこぼれてしまえばいいという思いが強かったのは確かだ。望みどおり、お皿は立っていた父の手の高さ届く前に落下をはじめ、あわてた父がすばやく腰をかがめ伸ばした手の先にぶつかり、空中で斜めに傾いて中身を床の上に滑り落とすと床にたたきつけられガチャンとって割れた。破片が飛び散り、それは床の上の魚にも届いていた。

私は床の上に無残に投げ出された魚と割れたお皿の上に視線を落とし、じっとしていた。目を上げて父を見るのが怖かった。すでに後悔の念にさいなまれていた。動悸と吐き気が一気にやってきた。母が台所から駆けつけた。その有様を見て、

「食べたくないなら何も食べなくていいよ」

と冷たく言う。と床の上を片付け始めたが、絶対に、泣いていた。

私は息がしづらくなるのを感じながら、そのまま家を飛び出した。のどのあたりが締め付けられ、頭ががんとなった。夜のねっとりとした空気を振り払うようにぐんぐんスピードをあげて走りに走った。苦しくなればなるほど気が済むように思えた。髪の毛が涙と汗で湿った顔にべったりと張り付き、ますます息苦しくなった。何も目に入らなかった。ただもう闇雲に走っていたので、目眩がしてよろけるように立ち止まってしまったとき、目に入ってきた夜空に煌々と輝く星と三日月の姿に驚いた。はあはあと肩を上下させながらしばらくそこにたたずんでいると自分がこの果てしないほどの夜空に落ちていってしまったのが不思議に思え、ぞつとした。夜風が吹いて汗で湿った体を冷やし、身震いさせた。

あの魚はもう食べるには危険だろう。捨てるしかない。おじさんの捕って来た魚だ。母が、おそらく私のために料理してくれた。でももう捨てるしかないのだ。たまらなくなつてどうしていいか分からなかったが、足は団地の方へ向かっていた。

明かりもつけず、うちわを片手におじさんは縁側に座っていた。ずいぶん冷静さを取り戻してはいたが、おじさんの顔を見ると申し訳ない気持ちで押しつぶされそうになった。おじさんははじめ私を見て少し驚いたようだったが、

「座ったら」

と、にこりと笑った。自分のこともあまり深くは話さないし、人のことにも自分から

は干渉しないのがおじさんのやり方だ。私はおじさんの横に腰掛けたが、何を話しているのかわからなかった。しばらく沈黙が流れた。

最初に言葉を発したのはおじさんの方だった。

「新しい作品ができたよ。持って来るからちよつと待ってなさい」

作品というのは拾ってきた貝殻やビンのかげら、砂や流木なんかでおじさんが描いている絵のことだ。それはたいい海の絵で、とても細かくきれいなので私はおじさんの作品を見るのをいつも楽しみにしていた。

「ほら」

手渡された物を見て少々驚いた。いつもの細かな写実的な絵とはまるで違っていたのだ。様々な形の貝殻や色とりどりのビンがただ無秩序にベニヤ板の上に貼り付けられているようにしか見えなかった。

「何かいつもと違うね……」

戸惑ってそうとしか言えなかった。

「少しね。でもこういうのも良いだろ」

おじさんはそう言ってベニヤ板を私の手から受け取り、うちわを扇ぎながら星空を眺めた。また、沈黙が流れた。

晴れた夜、おじさんの団地からは星空がいつも綺麗に見える。星のひとつでも流れて

くれればいいのに、と思い、しばらく夜空のあちこちに視線を走らせていたが、求めるものは何も見つけれなかった。

「おじさんはどうして海に潜るの」

これまでふれてはいけな思っていた質問が何故か不意に口をついて出た。やけになつていたのかもしれない。

「……海が好きだからね。それに、魚を捕らないと暮らしていけない」

その時おじさんがどんな顔をしていたのか、目を上げることができなかったので、私には分からない。芝生に目を落としながら、ただ続けた。

「自分が海が好きだなんてどうして分かるの。……もしかしたら魚を捕るためだけに潜っているかもしれないじゃない」

おじさんは、うん、と小さく答えた。それからまた静かに言った。

「そうかもしれないけど、でも、海に潜らないとしたら毎日何していいのかわからなくなるだろうな」

「それ、好きってことになるの」

「そう言って良いんじゃないかな」

「でも」

でも。その続きはさすがに口にはできなかつた。言葉をどうつないだらいいのかわから

なくて黙っているとおじさんが言った。

「最近、海に潜るとあの子に包まれているような気さえするんだ。それに、夜の海には行かない」

びっくりした。頭の中を読まれたみたいだった。いや、それよりもおじさんが自分からこんなことを話したというのが信じがたいことだった。あまりの驚きに、目を上げておじさんと顔を見合わせたとき、月明かりに照らされたおじさんの目が気になった。あおい。心なしか、この前よりもさらに青みを増しているように見えた。夜なのにもかかわらず。

「おじさん、目がまた青くなってない？」

そう聞くと、おじさんは

「そうかな？」

と言つてにこりとした。何故か嬉しそうに見えた。

その日以来、父とは気まずくなっていた。気の短い母には日常的に叱られていたために、母とそうなることはなかったのだが。帰る日が近づいていた。残りの日を私は部屋で読み物や勉強をし、涼しくなってくると散歩がてらにおじさんを訪ねたりしてすごした。その頃には立ちくらみが頻繁になっていたのだが、父や母には何も言わないでおい

た。けだるい感じがふわふわして気持ちいいとさえ感じるようになっていた。おじさんの目は会うたびごとに青く、青くなっていくようだったが、不思議なくらい樂觀的にしか考えられなかった。青みを増していくおじさんの目を見るたびにはっとするほど綺麗で、青というのはどこまで青くなるんだろう、などと訳のわからないことを考えては楽しんでいくくらいだ。なんて馬鹿だったのだろう。事態はもっと深刻なのだという事に気がつかされたのはそんな日々の中での事だった。

ある日の午後。勉強の合間の気晴らしに散歩に出かけた私は海から上がってくる坂道に向こう側から登ってくるおじさんを見つけた。漁からの帰りなのだろうと思って大きく手を振った。それに対しておじさんは何の反応も示さなかった。おかしいなと思いはがらもそのまま近づいて行くとおじさんはなにやらぶつぶつとつぶやきながらやっているのが分かった。

「おじさん」

かなり近くまで来てから呼ぶと大袈裟なまでに驚いたのだった。

「なんだ。びっくりしたよ」

気を落ち着けてからそう言った。

「おじさん全然気づかないんだもん。こっちのほうがびっくりだよ」

「いや、ちよつと考え事してたもんだから。それに逆光で見えづらいよ」

普通ならいくらなんでも、と思いきや、おじさんの事となると、まあありそうなる事だ。と考えてしまうのだ。わたしはそのまま「気をつけてね」と言っておじさんと別れた。

まともな思考というのはいつだって一体いつ戻ってくるのか分からない。しばらく坂道を下っていたのだが、突然それはやって来た。

おじさんの目だ。絶対におかしい。あんな近距離に来るまで気がつかないなんて。ひやりとして私はくると向きを変え、駆け出した。

視力は確実に落ちているんだ。そうだ、剃り残された髭、以前とは違う貝殻の絵、それに、さっきおじさんがぶつぶつ言っていたのは……。今思えば、確かに数を数えていたのだ。海から家までの歩幅を測っていたのではないか。例にもれず暑い日だった。あまりにも暑い。ふらふらになりながら団地に向かって走り続ける。汗さえかいていなくなつたように思う。もっと速く走れないのか。もどかしさにいらつきながら方向の定まらぬ足の前へ前へと投げ出した。このときばかりは食事をちゃんと摂っていなかったことが心から悔やまれた。目の前に半透明の白い膜が張り付いているようだった。おじさんの目。

「長年海に潜ってきたからね。そろそろ海の色がうつつてもおかしくはないだろ」

おじさんの笑顔が頭をよぎった。

おじさんはちゃんと魚を突いてくるのではないか。自分自身をなだめるようにそう考えた。ただの思い過ごしではないか。おじさんは魚をあんなに正確に突いてくるのだから。恐ろしいほど正確に。それに、「よく見える」と言っていた。「いろんな物」が。「魚なんか」が。はつとした。一瞬、ばかばかしくさえなった。まともな思考はまたどこへ行ってしまったのだろうか。

おじさんはちゃんと見えているのだ。そう、海の中では。おそらく以前よりもずっと鮮明に。ああ、やっぱりおじさんは海に潜りすぎたのだ。目の色が青くなったのは海の色が映ったんじゃない。おじさんの目の中も海になってしまったのだ。もうおじさんは海の中しか見ることができない。海の外の世界は海中の深いところから空を見上げたときのようにしか映らないのだ。おじさん自身は気づいていたに違いない。目の色の青さが増すにつれ、海の中の景色がより鮮明になり、それとは逆に地上ではどんどん見えなくなっていくことに。それでもおじさんは海に潜るのをやめなかったのだ。どうして。どうして。

突然、足から頭に向かって何かふわりと言う感覚が上ってきた。まるで重さというものがなくなつたかのようなだった。軽い。それと同時に目の前が真っ白になった。

目を開けると海の中だった。水はとても澄んでいて海上から降りそそぐ太陽の光でも明るく、視界は信じられないほどはつきりしていた。海はどこまでも広く、とても静かだった。水の感触がひやりとして気持ちいい。さんご礁の中を泳ぐきれいな魚たち。その向こうに、おじさんの姿があつた。何かに導かれるように、ただまっすぐに泳いでいた。なんだろう。おじさんの先に何か動くものが見えた。目を凝らして見て、はっとした。周りの魚の群れには目もくれず、おじさんが見つめていたもの。それは、小さな男の子の姿だった。ずいぶん距離は離れていたが、おじさんは男の子の後について泳ぎ続けていた。ああ、と思った。おじさんは、あの青い目でずっとあの男の子を見ていたのだ。そうすることが地上での視力を失うことに繋がると分かっている。

男の子に導かれながらおじさんはどんどん先へ泳いでいった。どんどん、遠くへ、遠くへ。明るく澄みきった水の中でも姿がほとんど見えなくなるくらい遠くへ。おじさんが行ってしまふ。そう思っても、体が動かなかつた。追いかけたところで何にもならない。ただ、そこに浮かんでいることしか出来なかつた。辺りに降りそそぐ日光よりもっとまぶしい光の中におじさんは消えていった。

「起きた！」

気がつくと病院のベッドの上だった。腕には点滴の針が刺さっていて、枕もとには母

がいた。母の話によると、どうやら貧血か何かで倒れてしまったらしい。しばらくは頭がぼおつとして何も考えられなかったが、はっとおじさんの事を思い出した。

「おじさんが」

そう言うと、しばらく何やらガミガミと言っていた母が急に静かになった。

「ねえ、おじさんはどうしたの」

母の様子に何かあつたに違いないと感じ、不安に押しつぶされそうになりながら尋ねた。

おじさんは病気だった。ついにおじさんを病院に連れて行くことに成功した母の話によると、おじさんの目は、確実に見えなくなってきたり、目の色の変化もその病気の一症状だったのだ。医者は入院を勧め、海に潜ることを禁じた。しかしおじさんは頑として聞かなかった。海に潜れないなら何の意味もないと言って、珍しく取り乱していたそうだ。どうしてそこまで海にこだわるのか、尋ねても絶対に答えなかったらしい。しかたなく、母が頻繁に様子を見に行くこと、それから定期的に病院に連れて行くこと、限界がきたら海には潜らないことを条件に、おじさんは入院を免れたらしい。

私は、あの静かで澄んだ海のことを思い出していた。

思いがけず数日間入院することになってしまったので予定が狂ってしまい、急いで帰らないと学校の開始日に間に合わないという状況になってしまった。私は退院したその日の飛行機に乗ることになった。家に帰っている時間もなかったもので、前の日に母が荷物を全部まとめて病院まで持ってきてくれていた。

港に向かう車の窓を生まれ故郷の風景が流れていく。サトウキビ畑、あじけない住居、道端の野良犬、墓地、曲がりくねった、急な坂道。――灰色の、島。私は窓を開けて故郷の空気を体中いっぱい吸い込んだ。潮の混じったような、ねっとりとした、だるく滞った空気。そろそろ海が見えてくる。墓地を回り込む坂道を下りきった時、灰色の風景の中に青い色が飛び込んできた。

おじさんは、岬の縁にモリを片手に立っていた。そして、ぎぶん、と海に飛び込んだ。思いがけなく涙が流れた。素直な涙だった。海に潜るおじさんの姿を見てこんな風に泣けることをとてもうれしく思った。灰色の島の中の青。それは、日の光を受けて、とても、とても奇麗に輝いていた。

山原みどり（やまはら・みどり）／法文学部・国際言語文化学科三年

琉球大学びぶりお文学賞 佳作

コルネリアの幽霊屋敷

大谷 凛

雨の夜に穴を掘る。

××××を埋めるため。

一、子供達と幽霊屋敷

コルネリアには最近、とても気に入らないことがあった。近くの村の子供達が、勝手に屋敷に入り込んで遊ぶのだ。

確かに、一人で住むには広すぎる屋敷だ。手入れの行き届いていない所も多い。が、だからといって他人に土足で踏み込まれてもいいわけがない。そして何より、コルネリアが一番気に入らなかつたのが、その子供達がこの屋敷のことを『幽霊屋敷』『呪われた館』などと呼ぶことだった。ずっとこの屋敷で暮らしてきたコルネリアにとって、それは何よりも耐えがたい言葉だった。

どうにかして、あの子供達を追い払えないものか。思案をめぐらせているうちに、あ

る計画が浮かんできた。

「……幽霊屋敷なら、幽霊が出るはずよね……？」

スコップが見つからない。

仕方がないから、手で掘った。

「おい、早くー！」

「待つてよー！」

いつもの子供達がやって来る声を聞き、コルネリアは二階の主寝室からそつと階段に移動した。仕掛けは上々、後は見つからないように、タイミングを外さないようにするだけだ。

彼らは、いつも一階の廊下の窓から入っている。その窓は割れていて、子供が楽に通れてしまうのだ。割れたガラスを踏み越えて入ってくる子供達。ところが、最初に入ってきた子供がいきなり足を滑らせた。

「うわあ！」

盛大に尻もちをつく音を聞いて、コルネリアはクスツと笑った。あのあたりの床には、滑りやすいように油が塗ってあるのだ。

「大丈夫？ うわ、ベトベトじゃん……」

「あ、血が出てる。怪我したの？」

「手、切った……」

どうやら、散らばっていたガラス片で手を切ったらしい。手の平を押さえながら立ち上がった子供に、他の二人が心配そうに声をかける。

「どうする？ 外に井戸があつたけど、あそこで手洗う？」

「えー、あんな古井戸使えるのかよ……」

「一応見てみようよ。使えるならしめたもんじゃん」

転ばないように慎重に、子供達は屋敷を離れる。そしてそのままゆっくりと井戸まで向かう。一人が井戸に小石を投げ込むと、少し間をおいてポチャンと小さな水音が返ってきた。

「よし、水はあるぜ」

「滑車とかもまだ使えそうだよ」

怪我をした一人を手近なところに座らせ、二人は水を汲み始めた。

「失礼ね、うちの井戸はちゃんと使えるわ。水だって綺麗よ」

二階の窓からその様子を覗いていたコルネリアは憮然と呟いた。そして、あらかじめ集めておいた親指の爪ほどの大きさの小石数個を窓から思いっきり子供達に向かって投

げつけた。

「うわあっ！」

「何だっ！」

唐突に小石を投げつけられ、とっさに投げつけられたとおぼしき方向を見るが、無論そこには誰もいない。

「おい、今小石が投げつけられなかったか？」

「うん……で、でも、僕達以外には誰もいないはずだよね？」

恐る恐る周囲を見渡してみても、当然ながら誰もいないし何も動かない。

「これ……実は本当に、幽霊がいたとか……？」

「ま、まさか。だって、今まで一度も出なかったじゃないか！」

「じゃあ、この小石はどこから来たのさ」

薄気味悪そうに話す二人に、怪我をしていた一人がイライラしたように言い放った。

「幽霊がいるにしろいないにしろ、ここで帰ったらみつともないだろ。もう一度確かめにいくぞ」

二人は最初渋っていたが、結局はそれに付き合うことにした。男としてのささやかなプライドであったが、男ではないコルネリアには理解できなかった。

「信じられないっ。手加減なんかしなきゃよかった！」

そう怒鳴りながら階段を駆け下り、台所に向かう。戸棚から持てるだけのナイフやフォークやスプーンなどを持ち出して、割れた窓の近くに隠れておく。足元に気をつけながらそろそろと入ってくる子供に、それらを思いっきり投げつけた。

「うわああああっ！」

「幽霊だー！」

「もうやだあ、僕帰るー！」

一番大人しそうな子供が、泣きながら走り出す。それに続くように、他の二人も逃げ出した。

「ふふん、これにこりたらもう二度と来ないことね。ここは私の家なんだから」

散らばったカトラリーを全て回収し、コルネリアは満足そうに笑った。

「……折角だから、久しぶりに台所の食器を全部洗おうかしら」

機嫌よくスキップするコルネリアの姿は、赤錆にびっしりと覆われたナイフには映らなかった。

二、村人と幽霊屋敷

爪がはがれた。手が痛い。

でも、私はやめない。

いつもの癖で、主寝室の窓から外を眺める。もうあの子供達は来ないだろう——あれだけおどかしたのだから。

風にそよぐ草花や梢の間から時折飛びたつ小鳥を眺めて楽しんでいると、近付いてくる人の気配を感じた。

「……また来たのかしら。あの子ども」

主寝室を出て自室の前を通り、廊下の窓から外を眺める。やってくるのは子供ではなく、数人の大人だ。

「もしかして、あの子ども達のやったことを謝りに来たのかしら」

なら、そっとしておいてくれるだけでもいいのに。そう呟くコルネリアの考えは、彼らが力ずくで玄関の扉をこじ開ける音にかき消された。

「何てことするのよ！」

コルネリアは慌てて玄関に向かおうとしたが、途中で思い直した。

大の男が何人もかかっているのに、コルネリア一人で勝てるわけがない。忌々しげに舌をならし、コルネリアは駆け出した。扉が開かれる前に、何とか策を練らなければ。

歪んだ扉から、一筋の陽光が埃だらけの玄関ホールに舞い降りた。

もう、私しかいないのだから。
泣き言なんて言ってもらえない。

「うわ、すごい屋敷だな……」

「おい、静かに歩けよ。埃がたつだろ」

入ってきた男達は、全部で五人。めいめい木の棒などを持っている。

「どこからいくんだ？」

「とりあえず一階からかな。ま、幽霊なんていやしないでろ」

「しつかし、本当に幽霊でも出そうな雰囲気だ」

「ハハ、まさか」

と笑った男の体が、突然白い何かに包まれた。

「おいっ！」

「何だこりゃ!？」

パニックになって暴れる男にまとわりつく何かを残りの男達が必死になって引き剥がそうとするが、男が暴れるため上手くいかず、逆にきつく巻きついてしまう。それでも、男を押さえつけたりして何とか男の顔を外に出させることに成功した。

「おい、落ち着け！ 取れないだろう！」

「い、嫌だ！俺はまだ死にたくない！」

「だから、助けてやるから暴れるなって！」

「……おい、待てよ」

一人が訝しげな声を上げた。

「それ、ただの布じゃないのか？」

「え？」

落ち着いてその白い物体をよく見ると……とところどころ薄汚れてはいるが、確かにただの布だ。

「何だ……布かよ……」

「それ、シーツなんだけどな」

文句を言いながら巻きついたシーツをはがす男達を階段の上から眺めて、コルネリアは不満気に呟いた。この分だと、枕の出番はなさそうだ。

「しかし、一体どこから？」

「さあ……多分二階じゃないか」

「だな。行ってみるか」

「うそっ」

コルネリアは慌てて二階の一番奥にある主寝室に逃げ込んだ。その後を、警戒しながら

ら男達が上る。こっそり聞き耳を立てると、どうやら一番近い位置にある客間に入ってしまったらしい。音を立てないように注意しながら、コルネリアはその近くに行ってみた。半開きの扉から覗くと、彼らが部屋を引つ掻き回す様子が見えた。

「ひどーい。こんなに散らかすなんて……」

コルネリアは一階から男達が投げ捨てたシートと火かき棒を持って来ると、そつと客間の扉を閉めて取っ手の間に火かき棒を通して扉が開かないようにする。シートは持つて、いつでも逃げられるように近くの部屋の扉を開けておく。しばらくすると、扉がガタガタいいはじめた。どうやら、扉を閉められたことに気付いたらしい。

「おい、何なんだ一体！ 誰かが塞いでやがるのか！」

「くそつ、開かねえ！」

怒鳴り声と共に、扉が壊れそうな勢いで揺さぶられる。取っ手の間で揺れる火かき棒は、あまり長くは閉じられないとばかりにカタカタと鳴り続ける。それでもしばらくは耐え続けたが、やがて耳障りな音を立てて床に転がった。

ボタンと勢いよく扉が開かれ、男達が飛び出してくるタイミングを見計らい、コルネリアは広げたシートを投げつけた。

「うわあ！」

「何だ何だ！」

「さつきと同じものよ」

再びパニックに陥る男達を見て、コルネリアは爆笑したいのを必死でこらえたために少しお腹が痛くなつてしまった。……気のせいにすぎないけれど。

(……え?)

背筋をゾクリとさせる違和感に、コルネリアは凍りついたように動きを止め——不思議そうに首をかしげた。

「私、さつき何してたんδρο」

何やら怖い思いをしたような気はするが……まあ、気のせいだろう。

そんなこんなで目を離していた間に、彼らはシーツを振り払って投げ捨てていた。

「一体何なんだ、ここはっ!」

「……やつぱり、何かいるんじゃないか?」

男達が怯えたように囁きあうのを聞いて、コルネリアはダメ押しとばかりに花瓶の水に緑の絵の具を入れ、そのまま男達にぶっつけた。

「ぎゃあっ!」

「な、何だよこれっ!」

ただの色水である。だが、実際に様々な現象の起こったいかにも妖しい屋敷で、怯えているところに何の前触れもなく緑色の液体をかけられて、それが何なのかを冷静に見

極めることなどできるはずもなかった。

「お、俺は帰るぞ。まだ死にたくなんかないっ」

「悪魔だ、この屋敷には悪魔がいるに違いないっ！」

口々に叫びながら、男達はほうほうのていで逃げ帰っていった。……壊れかけていた扉の片方を完全に破壊して。

「ひっどーい。何てことするのよ」

プリプリと怒りながら、コルネリアは何とか重い扉を立たせた。が、蝶番が完全に壊れている。直せない。仕方なく、元あったように立てかけてから棒や板で補強し、風が吹き込まないようにしておいた。反対側はまだ壊れていないので、こちらを使えばいいだろう。

作業を終えて振り返ったコルネリアは、風で流れてきたシートを見て深いため息をついた。

「……あれ、洗っても落ちないわよね……」

シートには、ばつちりと緑色のシミがついていた。

何とか穴を掘り終わる。

××を、冷たい泥に埋める。

コルネリアは、地下の倉庫を引つ掻き回していた。

「これじゃない……これも違う……」

色とりどりの端切れや丁寧にしまわれた古い花嫁衣裳、コルネリア自身が昔着けていたドレスなどをかき分けていく。古い絨毯や衣装箱をどかし、ようやく目当てのものを発見した。

「あつた！ 予備のシーツ！」

……結局、この間の緑のシミは落ちなかったのだ。十回目に洗って落ちなかった時、枕を投げなくてよかったと本気で思った。シーツに予備はあるが、枕に予備はない。もう誰も来ないにしろ、家の中は整えておかなくては。

(……あれ?)

今、おかしなことが頭をよぎった。コルネリアはしばらく考えていたが、結局その違和の正体は分からなかった。コルネリアは肩をすくめて階段を上っていった。

今日はいい天気だから、シーツを全部まとめて洗ってしまおう。やはり、太陽の匂いをするシーツで眠るのは気持ちがいい。全てのシーツを集め——シミのついたシーツはゴミ箱に入れたが——選択カゴにまとめて洗い場まで運ぶ。少し時間がかかったが、何とか正午までには全てのシーツを洗い終え、外に干した。

「ふう、さっぱりした！」

白いシートがいつぱいの日の光を浴びてはためくのは、やっぱり見ていて気持ちがいい。コルネリアが満足感をかみしめながらシートを眺めていると、何やら表の方が騒がしくなった。

「何かしら？」

爽やかな気分も一転、不機嫌そうな表情になったコルネリアは、屋敷の中に戻ってそのした方の窓を覗いた。……何やら大勢の人が集まっている。何故か焚き火をしているようだ。

「……何のつもりかしら」

他にも、不自然に大量の薪や藁がある。それを、屋敷の周りに積み上げている。人々が屋敷から離れ、牧師が聖句を唱えながら火のついた薪を持って近付いてきた時、コルネリアはようやくやく気付いた。

——彼らは、この屋敷を燃やすつもりだ！

「やめてよ！」

とっさに窓を開けようとしたが、嵌め殺しの窓は開くこともコルネリアの声を外に届けることもなかった。

「やめて！ やめて！ やめて！ やめて！」

コルネリアは叫びながら両手で窓を叩いたが、誰も気付かない。

燃える薪が投げられ——火が、ついた。

「やめて！ やめて！ やめて！ やめて！」

燃えやすい藁が最初に燃え、ついで薪に火がつく。大きくなっていく炎は屋敷の外壁をなめ、焦がしていく。

「やめて！ やめて！ やめて！ やめて！」

ゆつくりと、炎が燃え移る。コルネリアの屋敷が、燃えていく。

「やめてええええええええつ！」

血を吐くようなコルネリアの絶叫に水を差すように、一滴の雨がポツリと窓にかかった。空が暗くなり、屋敷を取り囲んでいた人々も訝しげに空を見上げた。

ポタリ。ポタ。ポタ。……ザアアアアツ。

まさに晴天の霹靂、誰も予想だにしていなかった大雨に、外にいた人々は慌てて走っていった。激しい雨はコルネリアに味方するように、炎をかき消して彼らを追い払った。が、コルネリアはそれに喜ばなかった。心の奥底から湧き上がる何かに、完全に意識をとられていた。何かに取り憑かれたかのように、コルネリアはゆつくりと手を伸ばして雨に触れた。

……雨。

冷たい雨。激しい雨。

真つ暗な夜は冷たい雨と冷たい泥とで、まるで墓場のよう。

それでも。

引きずった、白いシーツに包まれた――

「……あー!!」

ふと我に返ったコルネリアは、そのことを思い出して悲鳴を上げた。

「シーツ！ 出しっぱなし！」

慌ててシーツを回収しに向かうが――当然ながら、シーツは全てびしょ濡れになっていた。

「あーあ……暖炉のところに干したら、何とかなるかなあ」

シーツをしぼり、居間の暖炉の周囲に紐やロープを張って簡単な物干し場を作っているうちに、コルネリアは何かを思い出そうとしていたことを忘れてしまっていた。

三、吟遊詩人と幽霊屋敷

ごめんなさい。寒いよね。

でも、私にはこうするしかない。

薪を暖炉にくべて、火をつけようとした時。勝手口の扉が叩かれた。

「……誰よ」

先程のこともあり、コルネリアは警戒しながらそちらをうかがう。

「どなたか、どなたかおりませんか！　どうかこの雨が止むまでこちらで休ませていただけないでしょうか！」

「……」

どうやら、先程の連中とは関係ないようだ。コルネリアはしばらく考えて、声をかけた。

「誰ですか？」

「ああ、よかった。私は旅の吟遊詩人です。この近辺を歩いておりましたところ、いきなり的大雨に見舞われました。どうか、雨宿りをさせていただきたい」

楽器の類は水に弱い。旅をしているのだから多少は対策をしているのかもしれないが、それでも雨の中を歩くのは得策ではないだろう。

「……どうぞ。何もない屋敷ですが、雨はしのげましょう」

コルネリアは扉を開けた。

荷物を雨から守るように抱えて入ってきたのは、長い外套をまとったまだ若い男だ。

濡れた金色の髪が額や頬に貼り付いている。

(七十点。顔はいいけど、何だか優柔不断そう)

「大丈夫ですか？」

内心の呟きをおくびにも出さず、コルネリアは男の様子をうかがった。男は少し息を整えてから髪を払い、きちんと立ってコルネリアに礼をした。……かなり、背が高い。

「ありがとうございます。助かりました」

「そうですか。……では、居間へどうぞ。ここでは休めませんから」

コルネリアは男を案内して、居間へ向かった。

「……これは、何でしょうか」

「実は、天気がいいからと洗濯をしていたのですが、いきなり雨が降りまして……仕方なく、ここに干してあるのです。お見苦しいでしょうが、どうかご容赦を。……今、暖炉に火を入れますね」

男に長椅子の一つをすすめ、コルネリアは暖炉に火をつけようとする。が、うまくいかない。

「……あ、あれ？」

「私がやりましょう」

男はコルネリアから火口箱を借りると、サツと火を熾して暖炉に火を入れた。

「少し湿っていますね……この雨ですから、仕方ないでしょうけど」

「すみません、わざわざ手伝っていただいて」

「いえ、いいですよ。このくらい」

「……あ、何か飲むものを持ってきます」

火口箱を片付け、コルネリアは一礼して台所に向かった。ゴブレットとデカンタを取り出し、奥の食料庫に向かう。

真つ暗な食料庫の最奥に、刻印された文字も読めなくなった古い樽が一つだけ置かれている。蓋を開けて匂いをかいでみると、やはりワインのようだ。デカンタを直接突っ込んでワインを汲み、蓋を閉めて台所に戻る。デカンタから赤い雫がポタポタ垂れるのも気にせず、ゴブレットを取って再び居間に戻る。

その途中、雨音に混じってリュートの弦を弾く音が聞こえてきて、コルネリアは思わず足を止めた。最初は散発的に聞こえていたとりとめのない音も、やがて一つの旋律にまとまって広がっていく。柔らかなエチュード。

コルネリアが居間に戻ると、濡れた外套を脱いだ男がリュートをつまびいていた。

「あ、すみません……リュートの調子を見ておきたかったもので……」

「構いませんよ。……どうぞ」

小さなテーブルにゴブレットを置き、ワインを注ぐ。

「あなたは、飲まないのですか？」

「そ……その。笑わないで下さいね」

コルネリアは気まずそうにしていたが、やがて決心したように話し出した。

「小さい頃……父がワインを飲んでる時に、父の目を盗んでこっそり飲んでみたことがあるんです。そうしたらすごく気分が悪くなって……翌日も、頭は痛いし体はだるいし、喉もカラカラになってさんざんな目にあつたんです。だから……ちよつと、ワインだけは遠慮したいです」

「……なるほど」

男は苦笑して、ワインを飲みながら何気なく問いかけた。

「あなたのお父様は、今？」

「——！」

コルネリアは固まった。

そう、父がいて、母がいて。父は仕事が忙しかったが、食事だけはいつも一緒にしてくれた。コルネリアが話す他愛のない事柄の一つ一つに返事をしてくれて、母もそれを嬉しそうに微笑みながら眺めていて。

これ以上なくはつきりと、両親のことは思い出せる。それなのに……何故、『今』彼らはいない？

私はずっと一人でこの屋敷を守ってきたはずなのに。そう、一人で。

大好きな両親と過ごした記憶。ずっと一人で守った屋敷。どちらが本当なのだろう。……
ひどく、寒気がする。

「……失言でした。忘れてください」

こわばったコルネリアを見て、男はそう言って引き下がった。

「では、お詫びとお礼にこの曲を」

気まずい空気を払拭するため、男はリュートを持ち直して先程とは別の曲を奏でる。
思い出にひたれるほどは哀しくなく、感情を動かすほどは明るくない曲。雨音をかき消すことのない静かな旋律が、今のコルネリアにはひどく心地よかった。

祈りと別れは無言のままに。

ありがとう。ごめんなさい。

「もう発たれるんですか？ 泊まっても構いませんのに」

「いえ、雨宿りをさせていただいただけで十分ですよ」

夕方頃には雨も上がり、男はコルネリアが止めるのも聞かずに屋敷を発った。

「まあ……急げば日が落ちるまでには村につくと思えますが……気を付けて下さいね。
このあたり、狼が出るんです」

「ええ。気をつけます」

男は微笑んで歩き始めた。

「……あ！」

「何です？」

「あ……その……もし、またこの近辺にいらしたら、また歌を聞かせて下さい」

「ええ、喜んで」

そして、吟遊詩人は紅に染まる森に消えていった。その後姿が消えた後も、コルネリアはしばらくそこに佇んでいた。

——どうして、今まで父と母のことを忘れていたんだろう。

あんなに大好きな人達。鮮やかに脳裏によみがえる思い出。この屋敷にも、人がいっぱいいた時代はあったのに。

「……」

今、自分は何か重要なことを思い出そうとしている。でも、どこかにそれを忘れていた自分もいる。どうすればいいのだろう。思い出すべきなのか、それとも忘れたままでいるべきなのか。どちらにしても——すごく、怖い。

ふと気付くと、コルネリアは自分の部屋の前に立っていた。いつの間にか足が動いていたらしい。扉に手をかけ……開けられない。ほんの少し力を入れれば、開くはずなの

に。鍵など、最初からかかっていないのに。その『少し』が、どうしてもできない。

——この扉を、開けられない。

「……」

結局、コルネリアは部屋の前から立ち去った。居間に戻り、長椅子に横たわる。暖炉にはそろそろ新しい薪をくべなければいけないが、そんな気分になれない。

「私、は……」

どうして、一人なんだろう。辛い……もう、これ以上苦しみたくない。

答えを出すことを放棄して、コルネリアはクッションに顔をうずめた。ふつりと、燃やすものをなくした火が消えた。

——そして、コルネリアは何かを思い出そうとしていたことを忘れた。

四、悪魔祓いと幽霊屋敷

重たい体を引きずって、一人ぼっちの家に戻る。

部屋のベッドに横たわる。もう動かない。

あれから、この屋敷を訪れる人もいなくなり、コルネリアも毎日をのんびりと過ごし

ていた。

主寝室の窓から雲を眺めていると、何か黒いものが見えた気がして、コルネリアは空から地面に視線を移した。——黒い服の男が二人、こちらにやってくる。しばらくして気付いたが、どうやら神父のようだ。近く个村には牧師しかいないのに……何故、こんなところに来たのだろう。コルネリアが訝しげな顔をしていると、彼らは玄関の扉を——ご丁寧に壊れている方の扉を蹴破った。

「……！ ひっどーい！」

コルネリアは怒りのあまり、手近にあった枕を思い切り床に叩きつけた。

「いくら神父様でも、私の家に勝手に入るなんて許せないわ。絶対に許さない」

熱い。寒い。痛い。苦しい。

でも、もう助けてくれる人はいない。

「……ここ、ですか」

「ああ。百年以上も経っているらしい。気をつけろ」

まだ若い男と、壮年の男の声。

「どうします？ まずはどこから？」

「……二階だ」

二人はそのまま階段を上つていき——唐突にその足元が滑り、二人は階段を転がり落ちていった。

「ななな、一体何がっ？」

「絨毯だ！ 引っ張られた！」

犯人は言うまでもなく、素早く隠れたコルネリアだ。

「血が出ているぞ、大丈夫か？」

「こっちは大丈夫です、少し切っただけですから……それより、腕が……」

若い神父は額から流れる血を拭いてもせず、おさえた左腕を見せた。確かに、ありえない方向に曲がっている。

「その腕では厳しいな。外に出た方がいい」

「いいえ。足手まといなのは分かりますが、せめて見学くらいはさせてください。僕にとってはこれが初仕事なんです」

「危険だぞ」

「知ってます」

「……気をつけろ」

「さっさと帰りなさいよ」

階段の陰で聞いていたコルネリアは慄然と呟いた。

今度は絨毯を踏まないように、神父達は階段を上っていく。見つからないようにしながら、コルネリアもその後を追う。

「客間ですね」

「無視しろ。毘でも仕掛けられていたらたまらん」

半開きの客間の扉を無視して通過する二人を見て、コルネリアは小さく舌打ちした。……見破られている。

とりあえずその客間に潜り込み、コルネリアは考えた。このまま屋敷を荒らされるのは癪だが、今コルネリアが出て行つたところでどうしようもないだろう。とにかく、何とかして屋敷から追い出さなければ。

「……あ、そうだ」

コルネリアはそつと一階に下り、割れた窓ガラスを拾い集めた。それを適当な布にくるみ、その上から火かき棒で叩いて細かく砕く。それらを持って二階に戻ると、二人は主寝室を調べていた。扉の陰から布を投げつけると壮年の神父がそれに気付き、手で打ち払った。

「ぐっ！」

「どうしました！」

「目、が……」

どうやら、ガラスの粉が目に入ったらしい。廊下で耳をすませていたコルネリアはクスリと笑った。

「待つて下さい、今水を持ってきます！」

若い神父はそう言うと、返事も待たずに主寝室を飛び出して階段に向かった。反対方向にいるコルネリアにも気付かないほど大慌てで。

「待て！ 別行動は——」

壮年の神父は目を押さえながらも立ち上がるが、それより早くコルネリアが主寝室の扉を閉じた。火かき棒を取っ手に通して開かないようにする。これで、彼らを分断できた。コルネリアはまず若い神父の後を追うことにした。

開けっ放しの勝手口をくぐると、井戸の傍らで若い神父が水を汲んでいるのが見えた。コルネリアはそっとその背中に近付き、思い切り体当たりをした。

「……！」

宙を泳いだ手が滑車を通る綱を掴んだが、古い綱は男一人の体重を支えきるほど強くはなかった。千切れた綱を握り締め、神父は井戸に真つ逆さまに落ちていった。コルネリアはとどめとばかりに、近くにあった人の頭ほどの石を両手で抱えて井戸に投げ込んだ。大きな水音がして、それきり静かになった。

「……後で、新しい綱を持ってこなきゃ」

コルネリアはそのまま屋敷に戻った。

嫌だ、私はまだ何もしていない。

でも、助けを呼ぶ声はどこにも届かない。

コルネリアが二階に戻ると、不自然に静まり返っていた。

「……………」

訝しげな表情を浮かべるコルネリア。だが、次の瞬間けたたましい音と共に主寝室の扉が打ち破られた。コルネリアはとっさに近くの客間に逃げ込む。そつと様子をうかがうと、どうやらあの神父は椅子で無理矢理扉を打ち壊したらしい。肩で息をしながら、椅子の背もたれを握り締めている。

「……全く……何て奴だ。とにかく……私だけでも仕事はしなければ……」

赤い目をこすりながら、神父は椅子を捨ててゆっくりと歩き出し——コルネリアの部屋の扉に、手をかけた。

「……………」

その瞬間、コルネリアは駆け出した。何か叫んだような気がするが、頭は真っ白になっ

ていて、何も分からなくなっていた。

神父が、ひどく驚いた顔でコルネリアの方に体を向ける。それに構わず、近くにあった椅子を掴んで振り上げる。振り下ろす。振り上げる。振り下ろす。もう一度振り上げようとしたところで、急に体の力が抜けていき、中途半端に力を入れられた椅子は廊下の向こうに飛んでいった。

「つはあ、はあ……」

コルネリアは廊下にへたり込んだ。あの衝動は、すっかりなりを潜めていた。

目の前にあるのは、倒れた神父。体中に壊れた扉の破片が突き刺さり、頭はぐしゃぐしゃに潰れている。……死んでいる。

「……!!」

途端に恐ろしい何かがこみ上げてきて、コルネリアはその場を走り去った。

だめ。いけない。それだけは。絶対。

そのまま走って居間にたどり着き、長椅子にうつぶせに横たわる。

今までの自分の全てが、今まで守ってきたものが砕け散ってしまいそうで、ひどく怖かった。

顔をクッションにうずめながら、コルネリアは目を閉じた。

怖いものは忘れてしまおう。嫌なものも忘れてしまおう。

……あの時のように。

五、真実の扉と幽霊屋敷

もう、おしまいなの？ 私は、何も出来ないの？

嫌だ、助けて。私は、まだ――

「こんにちは、お嬢さん。いらっしやいますか」

リュートの音色と共に聞き覚えのある声が聞こえてきたのは、コルネリアが庭で花を摘んでいた時だった。

「あ、あの人。また来てくれたのね」

摘んだ花を庭の一角に供え、コルネリアは小走りに玄関に向かう。まだ壊れていない方の扉を開けると、あの時の吟遊詩人が立っていた。

「こんにちは。お久しぶりです」

「また来てくれたんですね」

どうぞ、とコルネリアは男を中に招き入れた。

「そういえば、あの時は名前を聞いていませんでしたね」

「私の名前ですか？ ライエンと申します」

「ライエンさんですか。あ、私はコルネリアです」

居間へ通そうとするコルネリアを、何故かライエンは遮った。

「都で少し調べてきたのですが……百年以上も昔に、この国は恐ろしい流行り病に教われました」

「……はあ」

ゆっくりと歩き出すライエン。コルネリアは仕方なくついていった。

「一人でもその病にかかった者がいれば、皆はためらいなく家ごと捨てました。何しろ、かかってしまえば助かりませんから」

ライエンは、ゆっくり階段を上っていく。

「ですが、中には愛する者を見捨てず、最後まで寄り添った人もいます。……あなたのように」

「どういう意味です？」

コルネリアの表情が険しくなった。頭の中で、誰かが警鐘を鳴らしている。……これ以上、聞いてはいけなと。

「あなたは、病にかかった両親を見捨てなかった。自身が病に冒されても、たった一人で両親を看病し続けた」

ふと気付くと、階段を上り終えている。コルネリアは警戒して足を止めた。

「そうやって、誰かに最期を看取ってもらえた者は幸せです。……では、最期を看取った者は？」

廊下には神父の死体が転がっていたが、ライエンはあえて今だけはそれを無視した。

「本当は、あなたも分かっているはずです。あなたは」

「やめて！」

その言葉を遮るように、コルネリアが叫ぶ。ライエンは何かに突き飛ばされたかのように入れ、扉という扉がボタンと大きな音を立てて開いた。……いや、一つだけ、開かない扉がある。

「いつまで逃げ続けるのですか？ もう、あなたにここを守る理由なんか無いのに。誰も、あなたを責めません」

「うるさい！」

窓ガラスが割れ、鋭い破片がライエンに突き刺さる。だが、厚い外套と旅装のためにライエンはほとんど傷を負わなかった。

「私はずっと一人だった！ これからも！ 誰かに何か言われる筋合いはないわ！」

「なら！ あなたのご両親はどこへ行ったのです！」

「……………！」

コルネリアは凍りついた。ずっと二人だったはずなのに、確かにこの家に両親はいた。両親がいるから——矛盾する。

その間にライエンは立ち上がり、一つだけ開かなかったコルネリアの部屋の扉に手をかける。

「やめてえっ！」

我に返ったコルネリアが止めるより早くライエンは、コルネリアの部屋の扉を開けた。
「……認めたくなかったんですね。でも、認めなければ、あなたはいつまでも不幸なままです」

響き渡る悲痛な叫び声に哀しげに目を伏せ、ライエンはベッドの前まで歩く。そこに横たわっているのは、朽ち果てた死体。その小柄さとボロボロのドレス、かろうじて残っていた長い黒髪だけが、生前の姿を物語っている。

「……あなたはもう死んでいるんです。コルネリア」
それきり、屋敷は静かになった。

生きたかった。守りたかった。

だから、私は。

村人達は、心配そうな面持ちで屋敷を遠巻きにしていた。

あの吟遊詩人は、幸運にもあの屋敷から生きて帰って来れたというのに、次の年に戻ってきてもう一度屋敷に行くといい出した。全員で止めたが聞き入れず、本当に屋敷に入っ
ていってしまっただ。

吟遊詩人が入ってすぐに屋敷から何かが暴れているような音やガラスの割れる音、少女の悲鳴が聞こえ、やがて静かになった。

「……殺されたのか？」

誰かがそう呟いた時。扉が開いて、あの吟遊詩人が出てきた。

「生きてたぞ！」

「何という奇跡だ……」

村人達は駆け寄った。

「もうこの屋敷に幽霊は出ません。二階に悪魔祓いの方の遺体がありますので、それを回収してから焼き払ってしましましょう」

シートにくるんだ白骨死体を抱きかかえた吟遊詩人は、そう言って歩き出した。

「おい、どこに行くんだ？ その死体は？」

「彼女はコルネリア。この幽霊屋敷の主です。恐らくこの近くに彼女の両親の墓があるはずなので、その隣に埋葬しようと思います」

吟遊詩人は微笑んで、庭の方に向かっていった。村人達は顔を見合わせたが、吟遊詩人の言葉に従うことにした。

コルネリアの両親の墓は、すぐに見つかった。彼女が、花を供えていたからだ。また、井戸の中の死体も見つかり、二階にあった死体と共に少し離れた場所に埋葬されることになった。

薪と藁が屋敷の周囲に積まれ、火が放たれる。これで、彼女もきつと天の国へ行けるだろう。

皆が見守る中、少しずつ燃え落ちる屋敷。と、揺れる炎の向こう側に、哀しげな目をした黒髪の少女の姿が浮かび上がる。……コルネリア。生きていたいと、ただそれだけを願っていた少女。

「ああ、そういえば。歌を聞かせると約束しましたね」

ざわめく村人を尻目に、ライエンは微笑んだ。リュートを奏で、静かに鎮魂歌を歌いだす。コルネリアはしばらくそこに佇んでいたが、やがてかすかに微笑むとくると踵を返し、炎の向こう側へ消えていった。

乾いた風も炎に味方し、ライエンが長い鎮魂歌を歌い終わる頃には屋敷は原形を失い、炎もほとんど消えかかっていた。

「安らかに、コルネリア。あなたがあなたの愛する両親と共に、神の国で暮らせませうに」

彼女の亡骸は両親の隣に埋葬し、屋敷も全て燃え尽きた。もう、彼女を苦しめるものはどこにもない。

「なあ、あんたは何か知ってるみたいだけど……一体この屋敷で何があつたんだ？」

「……哀しいお話ですよ」

ライエンは微笑んで、リュートをつまびく。そして、静かに歌い始めた。

……死してなお大切なものを守ろうとした、一人の少女の物語を。

大谷 凜（おおたに・りん）（本名・親泊さやか）／法文学部・人間科学科二年



琉球大学びぶりお文学賞 佳作

名付け

村上 陽子

僕は固い木製の長椅子に座っている。その長椅子はちょうど僕の身長と同じくらいの幅がある。長椅子の幅は、僕が押し込められたこの部屋の横幅に等しい。ドアのない、おそろしく狭い部屋だ。両足を投げ出すこともできない。長椅子の前に五十センチほどの隙間があるだけだ。この部屋で僕にできることと云ったら、長椅子に腰掛けること、長椅子の上に寝そべること、長椅子の上に立つこと、その三つのうちのどれかしかない。

いや、もう一つあった。窓の向こうを見ることだ。長椅子に座ると、ちょうど目の高さにあたるところに嵌め殺しの覗き窓がある。その窓の向こうには劇場があった。劇場といつても、とても人間は立てそうにない。ミニチュアのような、小さな劇場。おそろしく人形劇か紙芝居のためのそれだろう。

こちらの部屋には電灯もなく、薄暗い。窓の向こうの劇場には赤い緞帳が下りている。煌々とかがやく電灯の下に作られているのだろう。窓の向こうはとても明るかった。覗き窓兼明りとり。この窓から見える景色だけが、今の僕に知りえる外部だ。爪先で壁を蹴ってみる。幕が上がりはしないだろうか。そうすれば僕がここにいる理由も、わかり

そんなものなのだが。

何事もなく時は流れる。いや、本当に流れたのだろうか。時計もなければ、太陽の位置も知りえない。腹も空かない。僕は時の隙間に囚われたのだろうか。

せめて音楽があればいい。音楽が流れていけば——それが初めの旋律から終わりの音まで流れていけば——時が確かに直線的に、よどみなく流れていることを確認できるのに。

目の前の緞帳を見つめ続けていると、赤い色が迫ってきて目が痛い。まばたきをして目をこすってみる。窓から目をそむけると、部屋の中には真つ暗な闇だけが滞っている。

本当は時が止まっていようと、流れていようと、そんなことはどうでもいい。どうせ仕事は辞めてしまった。今日も明日も明後日も、僕には何の予定もない。ぼろアパートの家賃をどう工面するかに頭を悩ませ、食い物の心配をするくらいが関の山だ。「ここ」は暑くも寒くもなかった。快適とは言いがたいが、寝る場所があるだけありがたいのかもしれない。

僕は姿勢を変え、長椅子の上に身を横たえた。寝返りは打てないが、足を伸ばすことはできる。仰向けになれるだけの奥行きもあった。天井は異様に高い。僕は覗き窓に背を向け、左腕を枕にした。つややかに磨かれた木の肌に息がかかる。目の前には、ただ

壁があるだけだ。体温が徐々に木肌に移っていくのを感じながら、僕は目を閉じた。

目が覚めて、上半身を起こした。身体の節々が痛い。やはり木の長椅子の寝心地は良くなかった。腹が減り、喉が渴いている。あごに手をやると、一日分かそこら伸びた髭の手触りがある。やはり時間は流れているらしい。このまま幾日も放置されれば、僕は「ここ」に監禁されたまま飢え死にするかもしれない。そう考えた途端、胸が絞り上げられるような不安が込み上げてきた。

「出してくれ！ 誰かいないのか！ 出してくれ！」

叫んだつもりだったが、声はずいぶんか細く響いた。覗き窓の向こうには、相変わらず幕を下ろしたままの劇場が取り澄ました表情を見せている。

「誰か！ 助けてくれ！」

叫びながら覗き窓を叩いた、その時。赤い緞帳がするすると上がった。

幕が開いたのなら「誰か」がいるはずだ。僕は大声を上げようと息を吸い込んだ。が、そのままそこで息を止めてしまった。舞台の上手から出てきたのは、赤いベストを着込んだ小さなネズミだったのだ。

ネズミは余裕たつぷりに舞台の中央に進み出て、うやうやしく僕にお辞儀した。

「このたびは、大変なお役目をお引き受けただけまして、どうも」

小さな手を胸の前で手もみをするようにこすり合わせ、キィキィいう高い声でネズミはそう言った。確かにしゃべったのだ。僕はネズミを操る糸がついてはいはしないかと、ネズミの頭の上をじつとにらんでみた。だが、そこには何も見つけられなかった。茶色の毛並み、濡れた黒い目、薄べったくて丸い耳。正真正銘、本物のネズミだった。腹話術師と調教師が後ろにいるのだろうか。それにしても、この身振りや口の動き。ここまですうまく調教できるものだろうか。

「や、驚かれるのも無理はない。お腹がお空きでしょう。喉も渴いてらっしゃるでしょう。すぐに食事の用意をさせましょう。ただ、あなたには仕事をしていただかなくてはなりません」

ネズミは流暢に言葉を操る。

「仕事って、何の」

僕は馬鹿みたいにそうたずねた。ネズミの髭の先がぴんつとふるえ、黒いビーズのよな目がきらりと光った。

「何、簡単なことです。あなたのような方には、至極簡単なこと。名前を付けていただきますたいのです」

「名前？」

「そう。我々に、名前を付けていただきたい。まずは、私に。そしてその後、私の九十匹の仲間たちに。百の名前を付けていただければ、あなたはその部屋から出られません。いかがです」

「百の名前ね……」

確かにそれは、そんなに難しいことではないように思えた。だが、なにしろ相手はしゃべるネズミだ。あまり簡単に請け合うと、面倒なことにならないとも限らない。

「僕はそもそも、なんでここにいるんだろう。自分の部屋で寝ていたはずが、起きたらこんな奇妙なところでいて、君みたいなの……その、変わった人に会ったわけなんだけど」

「我々に名前をくださるのか、どうなのか」

ネズミは僕の言葉に耳を傾けず、小さな拳をつくってキイツと鳴いた。僕は確かに腹が空いていたし、喉はがらがらしていた。それに何より「ここ」から出たかった。

「百の名前を付ける。それで僕は、家に帰してもらえるんだね」

僕はネズミに念を押した。ネズミはひどく悔しそうに、地団駄を踏んだ。

「物分りの悪いお人だ！そこから出して、休息と食事を差し上げる！翌日にはあなたはまた百の名前を考える！それがあなたの仕事でしょう！」

ネズミは小さな肩を震わせ、僕をにらみつけた。僕はといえば、覗き窓に鼻を押し付け、掌に乗りそうな小さなネズミと真剣に言葉を交わしているという事態に少し頭が混

乱し始めていた。

「その……つまり、僕は毎日名前を考えればいいわけだ。一日に百ずつ。そうすれば食事と休息がもらえる。そうだね？」

僕がそう尋ねると、ネズミは気ぜわしくうなずいた。

「もしそれを断ったとしたら……」

すべてを言わないうちに、ネズミが金切り声をあげた。

「勝手に飢え死にするがいい！」

前歯をむき出し、毛を逆立てたネズミは四つん這いになり、じりじりと覗き窓に近づいてくる。

「わかった。名前を付けよう」

僕は急いでそう言った。ネズミの目に宿っていた獰猛な光が少し弱まった。

「君の名前は……そうだな、ソクラテス。どうだい？」

赤いベストのソクラテスは上機嫌で、踊るように舞台の下手に去っていった。

「ああ、ありがとう！あなたに幸福が訪れますように！」

彼はそんな言葉を僕に投げてよこした。間をおかず、次のネズミが上手から現れる。

今度のネズミは何も着ていない。ソクラテスのように立ってしゃべったりしない。ずん

ぐりと丸い体をして、鼻をひくつかせている。つまり、ごく普通のネズミだった。そのネズミも舞台の中央に進み出て、正面を向いて僕を見ている。

「バツカス」

僕がつぶやくと、バツカスはくると向きを変えて下手に消えていった。その次のネズミは、体の色がソクラテスやバツカスよりすこし白っぽい。しなやかな体つきをしている。雌なのかもしれない。舞台中央で、そのネズミは小首を傾げるような仕草をしてみせた。

「クレオパトラ」

クレオパトラは優雅に下手に去る。

だが、目の前に現れたネズミの特徴を見とって名前を付けてやったのは、最初の十匹くらいまでだった。喉の渴きは耐え難くなっていた。無駄に明るい小さな劇場を見続けているせいで、目の表面が乾いてくる。真つ暗な狭苦しい部屋にいるのにも飽き飽きした。

僕は上手から現れ、中央に走り出では下手に去っていくネズミたちをろくに見もせず、機械的に名前をつぶやきつづけた。ナポレオン、ジャンヌ・ダルク、チンギス・ハン、ゲーテ、シェイクスピア、ヘルマン・ヘッセ、モーツアルト、ベートーベン……。頭に浮かぶ名前をかたつぱしから唇に乗せていく。舞台に立ち止まる暇もなく名前を聞

き取って駆け抜けていくネズミもいれば、言葉に詰まった僕を舞台中央でじれったそうに見上げてくるネズミもいた。

上手から現れたときはただのネズミだったものが、下手に消えるときにはラスコーリニコフになっていたりドン・キホーテになっていたりする。そのことがネズミたちにはとても重要らしかった。ネズミたちは名前を聞き取ると、小さな耳をぴくりと動かし、長い尻尾を一振りして、足早に下手に去っていく。

「ドリアン・グレイ」

それが百匹目の名前だったらしい。もう舞台の上手から現れるネズミはいなかった。赤い緞帳がするすると下りる。

何もなかったはずの壁に、すっと切れ目が走る。その切れ目から明かりが漏れた。壁を押すと、その壁は拍子抜けするほどあっけなく外側に開いた。僕はようやく、あの狭苦しい部屋から解き放たれた。壁は僕が体を押し出すのと同時に閉じた。

僕はビジネスホテルのシングルルームのような部屋に立っていた。後ろを振り返っても、壁には切れ目も何もない。ベッドとテーブルがあり、テーブルの上には食事が用意されている。窓もなければ、テレビもない。殺風景な部屋だった。

ドアは二つ。一つはクローゼットのドアだった。スウェットの上下や下着、タオルや

バスローブがきちんとたたまれて入っていた。もう一つのドアを開けると、ユニットバスになっていた。トイレットペーパーが備え付けられ、洗面台には歯ブラシや髭剃りが用意されている。蛇口をひねると、熱いお湯が出た。狭い空間に湯気が立ちこめ、洗面台の鏡が曇る。曇りを拭きとって鏡を覗き込んでみた。目が充血して髭が少し伸びているくらいで、別段変わったところはなかった。ぐるりと見渡してみたが、このユニットバスにも窓はなかった。

つまるところ、僕は密室から密室に移動しただけだった。だが、この部屋の方があの長椅子の部屋よりはるかにマシだ。僕はテーブルの前にあぐらをかいて、用意された食事を食べようと箸を取った。

その時、机の上にもう一つ、あるものが置かれているのに気が付いた。上蓋のない、銀色の懐中時計である。秒針がカチカチと小さな音をたてている。時計は十二時四十五分を指していた。夜なのか昼なのかは分からない。ぼくは上着の胸ポケットにその時計を押し込み、まだ温かい味噌汁を一口すすった。

翌朝目を覚ますと、僕はまたあの長椅子の上にあった。ポケットをさぐってみたが、昨日の時計は見当たらない。昨日の夜、シャワーを浴びてスウェットに着替えた時、時計は上着にしまったままだったのだ。間違いなくベッドに潜り込んで寝たはずだったのに、

どうしてまたこの長椅子の部屋に押し込められているのか。僕は昨日切れ目が走った壁をなでてみた。どこにも切れ目はない。全体重をかけて押ししてもびくともしない。

あきらめて、覗き窓に目をやると、劇場の赤い緞帳が上がり始めた。今日の仕事の幕開けというわけだ。今日もソクラテスのお出ましか、と思っただが、走り出てきたのはごく普通のネズミだった。仕方なく、僕はまた名前をつぶやきはじめる。今日は日本の偉人シリーズだ。聖徳太子、小野妹子、藤原鎌足、小野小町、平清盛、源義経、武蔵坊弁慶…。

緞帳が下り、壁に切れ目が走る。そこを出ると、やっぱり昨日の通りの部屋だった。用意された食事のメニューだけが昨日と違っていた。

脱ぎ散らかしていた僕の服は、クローゼットにしまわれていた。鼻を寄せてみると、ほのかに洗剤の臭いがする。洗濯されているらしい。上着のポケットを探ると、固い手触りがあつた。時計は八時三十五分を指していた。

日が経つにつれて、「ここ」での生活の規律が漠然と飲み込めてきた。僕はいつもこちらの部屋のベッドで眠るが、朝は長椅子の上で目が覚める。このことに気付いて以来、僕はスウェットのポケットに懐中時計を突っ込んで眠るようになった。初めの夜のように体が痛いという思いをしたことはない。あの長椅子に僕が移動させられるのは、目覚

めるほんの数分前に違いない。

仕事はいつも朝の八時に始まる。朝か夜かはあいかわらず判然としないが、僕は仕事が始まる八時を朝だと決めることにした。そして、仕事が終わると劇場の緞帳は下りる。壁に切れ目が走り、僕はこちらの部屋に戻される。戻れば食事が用意されている。味も量も申し分なく、今のところ同じメニューが食卓に上ったことはない。脱ぎ散らかした服や濡れたタオルもきれいに洗濯され、クローゼットに戻されていた。

ソクラテスが食事と休息を与える、と言った言葉に嘘はなかった。ただ、それ以外のもの、つまり娯楽とか自由とかいったものは僕にはまったく与えられなかった。だから僕は自分が置かれたこの状況がどんなものなのか考えたり、翌日の仕事をすみやかに終わらせるために新しい名前を用意したり、部屋を徹底的に調べてみたりすることに時間を費やした。

部屋の床に耳をくっつけて寝転がってみたり、クローゼットの中身をかきだして壁を叩いてみたりした。浴室の壁をシャワーヘッドで思いっきり殴りつけてもみた。どれも効果はなかった。叩いた音から察するに、部屋の壁は決して薄くはないようだった。それに、外からの物音というものが一切聞こえてこない。僕の耳に入るのは、僕自身がたてる物音だけ。静かすぎて耳鳴りがするほど「ここ」は静かな場所だった。

部屋を調べるのに飽きたり疲れたりすると、眠った。そして一度眠ると、僕は翌朝ま

で決して目覚めることができない。

眠気をこらえて、起きたまま朝の八時を迎えれば、長椅子の部屋の壁からこちらの部屋に移動できるように、こちらの部屋から長椅子の部屋に移動することができるかもしれない。それを試してみたこともあったが、時計が夜の十二時を過ぎると僕のまぶたはどうしようもなく重たくなり、閉じてしまう。今のところこの試みは成功していない。僕をここに押し込めた奴が、こちらの部屋から長椅子の部屋への移動を見せたくないとするれば、そこに脱出の契機があるはずなのだが。

だが、僕は本当に「ここ」を出ていきたいのだろうか？毎朝出勤する必要もなければ、食べ物に事欠くこともない。他人と顔を合わせることもない。まったくさびしくない、退屈しないと言えば嘘になる。だが、自由がないことをのぞけば、それなりに快適な生活なのだ。

働いていた頃、家のドアを開けたら職場に着いているという状態になればいい、と思ったことがよくある。「ここ」ではそれが実現したわけだ。しかも自分でドアを開ける必要すらないときている。名付けの仕事は二十分足らずで終わる。僕には二十三時間以上の余暇がある。その余暇の使い道がないだけだ。

しかし、自分のアパートに帰ったところで、僕の状態は「ここ」とどれほど変わると

いうのだろう。仕事もなければやりたいこともない。有り余るほどの時間を、僕はどう使えるというのだろう。求人紙を片手に、この身体をスーツに押し込んで町を歩き回るしかない。身体をスーツに押し込むより、「ここ」に押し込んでおいた方がまだマシなのかもしれない。

「ここ」に来る前、僕は広告代理店で営業をしていた。地方都市の小さな店にも、それなりに広告の需要はあるものだ。地元を中心にチェーン展開しているメガネ屋と携帯電話の小売店が僕の担当で、そこから回される仕事で細々と業績を上げていた。

朝の七時に起きて九時に出勤。午前中に雑務を終え、午後からは外回りに出る。制作の担当者と打ち合わせをし、仕上がりってきたものを印刷所に回す。営業会議で一日の報告をする。

そんな単調な毎日に歪みが出始めたのは、メガネ屋の経営不振で広告を打ち切られた頃からだ。僕は企画書を持って飛び込み営業をしたり、大きな仕事のプレゼンテーションに臨んだりしたが、どれもうまくいかなかった。たまたま仕事にありつけたとしても、予算は微々たるものだった。新規の仕事をなかなか取ってこられない僕に、上司は渋い顔をした。「お前には企画力がない」と何度も言われた。営業は顧客の漠然とした要望を聞いて、その場でプランニングする力量がないとダメなのだ。

だが「メガネを売りたい。コンタクトも」とか「新機種が出たからプッシュして」程

度の要望と、少ない予算を提示する顧客に、どんな企画を提示すればいいのやら。チラシ、ダイレクトメール、セールの告知以外に何か方法があるのなら教えてもらいたい。そしてその程度の仕事なら、新規でうちの代理店に頼むより、昔からのおなじみさんの方が安心だということになってしまふのだ。

常連客をしつかり捕まえた上で新しい仕事も取ってくる。危ない仕事には早めに見切りをつける。そんな努力もせずに、惰性で仕事を続けてきたから痛い目を見るのだと同僚にイヤミを言われもした。その通りかもしれない。一度歪んでしまったものを、もう一度元に戻すのは骨が折れる。

通らないことがほぼ確実な企画を立て、見積もりを立てて飛び込み営業に向かう。仕事を取れないければ、その一日は遊んでいたのと同じことだ。夕方に会議で成果のなかった一日のことを絞られる。そんな日々がしばらく続いた。決しておもしろくはないが、やろうと思えばできない仕事ではない。続けていればとりあえず給料は振り込まれる。そのうち新しい顧客を得ることもできただろう。だが、馬鹿馬鹿しかった。歪みを直そうとすればするほど、仕事への意欲は足りずりと後退していった。まじめにやって馬鹿を見るなら、いつそのこと遊んでやろうと、漫画喫茶に入り浸っていた時期もある。すべてを白紙に戻せたら、どれだけ楽かと思うようになった。

次第に朝起きるのが辛くなった。会社に休みの連絡を入れ、自分の部屋で終日ごろご

ろしていた。眠るのに飽きると、学生時代に買った古い小説を読んだ。分厚い本を読み終わる頃にはもう明け方だった。結局、次の朝もベッドから脱け出せない。一カ月ほどだらだらと会社を休み続けた後、僕は辞表を出した。

金に事欠かず、あくせくせず、時間に潰れていく暮らしを、誰もが一度は夢見たことがあるはずだ。「ここ」の状況は、それに近いと言えないこともない。自由がほしいと言つてみたところで、僕を自由にさせておいたら一日中何もせずに部屋の中に閉じこもっていることはあきらかだ。「ここ」を離れてまで手に入れたい自由など、僕にあるのだろうか。

してみると、眠ってしまうことも偶然ではないのかもしれない。僕は無意識のうち、自分が「ここ」から出て行けないような状態を作り出しているのではあるまいか。僕は脱出の契機を見つけたくなって——少なくとも今はまだ——たいした抵抗もせずに眠気に身をまかせている。僕の無意識が、ここに居続けることを望んでいるのだ。

この仮説はなかなか有力なものに思えた。僕は眠れと言われたらいくらでも眠つていられる。だが、そんなに眠りが深いほうでもない。誰かが身体に触れたらきつと飛び起きるだろう。毎朝毎朝、寝たままベッドから長椅子に移動させられているなんて信じがたい。

結論。僕は自分で望んでここにいます。ここでの生活のデメリットはメリットよりも少ないのだ。デメリットは不自由なこと、ただそれだけ。メリットは清潔な部屋とうまい食事。それに、他の人間と会わずにすむ。それは僕にとつてうれしいことだった。気に食わない奴と顔を突き合わせ、ささいなことで傷付くのはもうたくさんだ。人の目からも、言葉からも隔離された場所。僕だけの場所。そして僕はここで働いて、自活している。この状態が心地よいと言ったら、人は笑うのかもしれない。だが今の僕にはそう思えるのだ。

それに、名付けの仕事はけっこうおもしろくもあった。僕がこれまで生きてきた中で覚えた歴史上の人物、小説の主人公、歌手の名前や曲のタイトル、いつ覚えたのかわからないような国名や地名。そんなものを一つひとつたどっていける。赤い緞帳が上がり、走り来るネズミたちに名前を与えていると、僕は支離滅裂な物語の断片を語る語り手になつていくような気がする。

「カモメ」の「ジョナサン」が「空」を舞い、「モビー・ディック」が「深海」を駆け巡る。「エイハブ」が「スカーレット・オハラ」に出会って「キス」をする。「南北戦争」の最後に「リンカーン」が「帽子」を脱いで、向かいから来た「人民」に「挨拶」するが「暗殺」される。「塀」から落ちた「ハンプティ・ダンプティ」の「黄身」と

「白身」がごちやませになつて「水たまり」ができる。それを「王様」が踏みつけて「家来」があわてふためく……。こんな具合だ。気の利いた名前が口から飛び出てきた時には、思わず口笛でも吹きたいような気分になる。百の名前を付けるのに十分もかからない日もあった。

この仕事にもいくつかの「ルール」がある。

ネズミの性別と名前があらわす性別は重ならなくてもいいらしい。僕にはネズミの雌雄を見分けることはとてもできないが、男の名前を断つて女の名前も受け取ったネズミはいないし、その逆もない。ネズミがどうやって名前を断るのかといえば、僕が名前をつぶやいても舞台から去らないのだ。新しい名前を与えるまで、かたくなにじっとしている。

もつとも基本的な「ルール」は、同じ名前は二度使えない、ということだ。ある時、僕は「マリー・アントワネット」という名前をつぶやいた。それはすでに別のネズミに与えていた名前だったのだが、気づかずにふたたび口にしてしまったのだ。その名前を聞いたネズミは舞台の中央を立ち去らず、僕を見つめ続けていた。僕はそのネズミに別の名を与え、次のネズミにはわざとすでに使った名前をつぶやいてみた。そのネズミも微動だにせず僕を見つめていた。

漢字の名前はどうか。「たかし」とかいうありふれた名前には「隆志」や「孝司」や

「貴史」や、いろいろな漢字をあてることができるといって「たかし」はそのネズミ一匹だけの名前なのだ。「崇」だろうが「喬」だろうが関係はないらしい。

もつとも、これは驚くにはあたらない。僕にしてみれば、ソクラテスのように言葉をしゃべることもできない普通のネズミたちが、かたくなに自分だけの名前を求めていることの方が驚きだった。僕が与えた他のすべての名前を、舞台のそでで出番を待つネズミたちは聞き取って記憶しているのだ。少々薄気味悪いが、そうとしか思えない。

「エリザベス一世」の「一世」を「二世」や「三世」に変えるのもだめだ。ネズミたちはナンバーがほしいのではなく、名前がほしいのだ。おそらく。

そのかわり、それまでに与えられてない名前なら、ネズミたちはどんな名前でも受け取った。「馬鹿」や「阿呆」といったのしり言葉でさえも。「いんちき」、「ゴキブリ」、「ゲジゲジ」、「けちんぼ」、「うすのろ」。「ルール」を飲み込むためとはいえ、ずいぶんひどい名前を与えてしまったものだ。一度口にした名前をネズミが受け取ると、撤回がきかない。「まぬけ」も「とんま」も意気揚々と下手に姿を消していった。ネズミたちが僕の言葉をどれほど理解しているのか、まるでわからない。

とにかく、一匹一匹のネズミにその都度新しい名前を考えてやること。それが僕の理解した「ルール」の大枠だった。

その日、僕は少し調子に乗っていた。「睦月」から「師走」という名前を十二匹に与え、さらに「一月」から「十二月」までを十二匹に与えるのに成功していた。僕はさらに細かい「ルール」を知るために夢中になっていた。「月曜日」から「日曜日」、これも成功。

次は五十音を試してみよう、そう思った。上手から痩せて毛のそそけだった貧相なネズミが姿を現す。「あ」「い」「う」……。一文字ずつ口にして、ネズミの反応を見る。ネズミはぴくりとも動かない。「え」と言おうとした、その時。

どんどんどん。

唐突に尻の下に振動がきた。僕はぎよつとして腰を浮かした。長椅子の中から「誰か」が叩いている。そうとしか思えない振動だった。僕はネズミをほったらかしたまま、長椅子の方に向き直り、長椅子の側面を指でたどった。細い溝がある。そこに指をかけ、力を込めた。ギイツ！とネズミが鳴いたのを背中であら聞いた。長椅子は一ミリたりとも持ち上がらなかつた。僕はさつき自分がされたように、長椅子をどんどんと叩いてみた。長椅子はしんと静まりかえっている。しばらく長椅子をなでたりさすったりしていたが、どうにも方法が見つからず、僕は覗き窓の方に向きなおった。ネズミは毛を逆立て、目をらんらんとかがやかせてこちらを見ている。最初の日、ソクラテスが小さな身体をふくらませて全身で僕を威嚇したように。

僕はおそるおそる長椅子に腰を下ろし、「プラトン」とつぶやいた。プラトンはすつくと立ち上がり、堂々と下手に消えていった。上手から現れた新しいネズミの名前を考えながら、僕は常に尻に神経を集中させていた。長椅子の中には「誰か」がいる。それは確かだ。「ここ」は僕一人だけの場所ではなかった。いい気になってこれまで呑気に過ごしていた自分に腹が立ってくる。

尻の下の「誰か」は、ネズミではない。あれは拳を叩き付ける音だった。ネズミが東になって内側から長椅子にぶつかつたとしても、あんな音を立てることはできないだろう。僕の尻の下にいる「誰か」。君は何をしている？僕を見張っているのか？それとも……それとも、僕のように「ここ」に囚われているのか？

懐中時計は一秒たりとも休むことなく、確実に時を刻み続ける。時間は前へ前へと進んでいる。

僕の仕事はだんだんと辛いものになっていった。日ごとに長椅子の部屋に座っている時間が長くなった。たつた百の名前を考えるのに、今では五時間も六時間も時間がかかる。ようやく口に出した名前を目の前のネズミに断られ、すでに口にした名前だと気付いてまた悩む。そんなことの繰り返しだった。名付けの楽しみなんぞ、とつくの昔にどこかに行ってしまった。今はただ、百の名前を紡ぐのに必死になっているだけだ。

僕は以前の生活を思い起こしながら、注意深く名前を連ねている。「鉛筆」を思いければ、「鉛筆の芯」「鉛筆けずり」、「鉛筆のけずりかす」、「色鉛筆」というように、その言葉から連想されるものを何一つ取りこぼすことなく思い起こしていった。

「ここ」には本もなければテレビもない。新しい言葉を補給することができないのだ。辞書が一冊ありさえすれば、どれだけこの仕事が楽になるだろう。ネズミたちは相変わらず上手から飛び出してくる。

あの日、長椅子の中の「誰か」は、僕に警告したのかもしれない。名前には意味が必要なのだ。ただの数字や記号、音ではダメなのだ。ただの音でしかない言葉に意味を持たせること。それこそが名付けの意義なのだ。僕が五十音をしつこく続けていけば、名付けの仕事を放棄したととられても仕方なかったのかも知れない。僕は「ルール」を破りかけていた。「ここ」で生き残るために、僕が従わざるをえない「ルール」を。

「ルール」を破った時、何が起るのか。ソクラテスとプラトンには、覗き窓の前で立ち止まった。僕が名前を与えてやったからだ。だが、もしも僕があの時名前を与えることができなかったら？舞台のそでで出番を待つ、数え切れない名無しのネズミが彼らと同じように怒りを持って押し寄せてきたとしたら？あの覗き窓にはまっているガラスが、それこそ一体何の意味を成すだろう？名前にならない音がこの閉じられた空間を意味もなく浮遊するように、僕の身体が無数の肉片になって四散することがないと言い切るこ

とができるだろうか。

僕の仕事が滞りはじめてから、食事とは別に菓子が支給されるようになった。バターや砂糖をたっぷり使ったピラミッド型のケーキ。最初に出たとき、一口だけかじってみた。味は悪くないが甘すぎる。翌日からいつも同じ菓子が出た。甘い甘い菓子。僕はいつもそれに手をつけずに残した。

僕を「ここ」に閉じ込めている奴は、僕が苦しんでいるのを知っているのだろうか。ネズミたちが僕をここに閉じ込めているのだろうか。この食事の用意、洗濯された衣類、片付けられた部屋。こんなしつらはネズミたちには不可能なことと思える。

「誰か」のことが頭をよぎる。尻の下から拳をぶつけてきた「誰か」。あの「誰か」が僕の世話をしているとは考えられないだろうか。長椅子の下は「ここ」の外側で。「誰か」は「ここ」と外側を自由に行き来し、時折僕の尻の下に潜んでいるのではないだろうか。

ひよつとしたら、ネズミを劇場に解き放っているのも「誰か」の仕業かもしれない。僕が名を付けたネズミたちは二度とふたたび僕の前に現れない。あのソクラテスも、プラトンも。いや、もしかしたら現れているのだろうか。僕が識別できていないだけで、毎日同じネズミが上手と下手を横断しているのだろうか。

甘い菓子に手を伸ばし、皿からそれを取り上げてみる。たっぷり含まれていたバターがにじみ出て、指の腹を光らせた。「誰か」は僕を氣遣つてくれているのか。それは悪くない想像だった。たとえその氣遣いが的外れなものだとしても。

だが、ネズミたちは意志を持つてあの劇場に現れているように僕には思える。ただのネズミから、名前を持ったたった一匹のネズミになるために。「誰か」もまた、あのネズミたちの使用人にすぎないのだろうか。僕と同じようにネズミたちに養われているのか。あのネズミたちは、いったいどこから来てどこへ行くのか。「ここ」はいつたどこなのか。いくら問いかけても答えは見つかからない。僕の思考は堂々巡りで、いつも同じ終着点にたどりつく。「答えも理由もありはしない」。それが僕にとって納得のいく、ただ一つの答えなのだ。

今日も劇場の幕が上がる。最初の一匹に僕は「おでん」とつぶやいた。「おでんのたまご」、「おでんのこんにやく」、「おでんのだいこん」、「おでんのちくわ」……。思いつくかぎりにおでんの具を連ねてみたが、「おでんのしらたき」に至っても何も思い浮かばない。

おでんを食ったら、その後僕はどうしていたっけ。「おでんの汁」を「流し台」に捨てて、「ゴミ箱」の「蓋」、いや「蓋」はもう使った。「ゴミ箱の蓋」を開けて、そこに

「容器」を……。動かないな。「容器」ももう他のネズミの名前になっているのか。「箸」、だめだ。「割り箸」はどうだ。これはまだだったんだな。「ゴミ袋」、だめか……。

その後も僕はぶつぶつとつぶやき続けた。が、ついに言葉が枯れた。少なくとも僕にはそう思えた。上手から走り出てきたネズミが、舞台中央で僕の言葉を待っている。

「ほしいものがある」

僕はネズミに話しかけた。しかし、そのネズミはそれを聞くと下手に去っていった。次の一匹が僕の前に現れる。

「辞書だ」

今度のネズミもこれを聞くなり下手に消えていった。新しいネズミが姿を見せる。

「辞書がほしい」

ネズミはまたも僕の前を通り過ぎた。次の一匹。

「辞書をくれ」

これも名前として受け取られてしまった。彼は意気揚々と下手に姿を消した。また次の……。

「辞書！辞書だ！明日も名前がほしいなら、辞書をよこせ！」

ネズミは僕の言葉を最後まで聞き、下手に姿を消す。次のネズミが走り出てきたとき、僕はすっかり頭にきていた。

「辞書！」

そのネズミもまた走り去っていく。次の一匹が現れる。

「辞書！」

これはさっきのネズミが受け取った名前だ。こんどのネズミは動かなかった。それでいい。それでいいのだ。

「辞書！辞書！ジショ！じしょ！」

僕は何度もそのネズミに向かって同じ言葉を喚きたてた。

どんどんどんどん。

前の時と同じ。長椅子からの振動だ。僕は腰を浮かせ、長椅子を叩き返した。

「誰かいるのか！そこにいるんだな！あんたは誰だ！」

「誰」でもいい。言葉が通じる「誰か」なら。僕だけ言葉を吐くのはもうまっぴらだ。

僕は長椅子の側面の溝に指をかけた。ずりつ、とかすかな手ごたえがあり、長椅子の蓋が一センチほど手前にずれた。だが、それだけだ。それ以上はぴくりとも動かない。

「助けてくれ……」

ふいに光が差した。壁に切れ目が走っている。覗き窓に目をやると、劇場には幕が下りていた。ネズミは、僕が長椅子の中の「誰か」に話しかけた言葉を名前として受け取ったらしい。僕は壁を押しして部屋に戻った。テーブルの上には食事と菓子が乗っている。

辞書はなかった。箸を取る気も起こらない。僕は綿のように疲れていた。ベッドに倒れ、布団をかぶって泥の眠りをむさぼった。

昨日の出来事のおかげで、新しい「ルール」に気が付いた。名前は、長くてもいいのだ。「ジシヨジシヨダアシタモナエガホシイナラジシヨヲヨコセ」、「ダレカイルノカソコニイルンダナアンタハダレダ」。これも名前として立派に通用するらしい。いったい「誰」がこんな名前を呼ぶというのか。ソクラテス以外にしゃべるネズミにはお目にかかっている。仲間のネズミが呼ぶこともできない名前を得て、僕が名前を付けたネズミたちは、いったい何をしようとしているのだろうか。

まあいい。そんなことは僕には関係ない。名前は、名詞だけに限らない。文章でも、文節でも、話し言葉でもいい。それが重要なのだ。

今日の仕事の幕開けである。初めの一匹だ。

「むかしむかし」

僕がそこで言葉を切ると、ネズミは下手に消えていく。

「あるところに」

「おじいさんと」

「おばあさんが」

「いました」

今日の仕事は、なんとか乗り切れそうである。この分なら、しばらくはまた名前を付けるのが楽になる。

だが、言葉は繰り返し返し使えるからこそ意味があるのだ。「いました」はもう、今のネズミにやってしまった。他のネズミには永遠に使えない。こうして僕は、自分の持っているすべての言葉を削り取られていくのだろうか。膨大な数のネズミたちによって。ネズミの数と僕が知っている言葉の数、どちらが多いかなんて火を見るよりも明らかだ。しかもこちらは密室に押し込められて新しい言葉の補給ができない。ネズミの方はここで生まれて育つのか知らないが、尽きることなく飛び出してくるのだ。僕の言葉が尽きた、その時には。

「勝手に飢え死にするがいい」

ソクラテスの言葉が身の奥底からよみがえって、響いた。

あの時、僕がソクラテスの要請を引き受けなかったら、今頃どうなっていただろう。そう考えて、乾いた笑いが喉から漏れた。飢え死には遅かれ早かれやってくる。初めからすべては決まっていたのだ。僕が「ここ」に来たその瞬間から。僕にできることはただ、死が僕に到来する瞬間を引き伸ばすことだけ。人と会わず、言葉も交わさず、ただ自分が吸収してきた言葉を吐き出し続ける。そんなことを長く続けられる人間が、いつ

たはどこにいるというのだろう。

だが、それだけが僕の命をつなぐ方法なのだ。言葉によって積み上げられてきた記憶を切り売りすることだけが、「こゝ」に留まり続ける限りは。

その日の仕事が終わったのは午後十時だった。十四時間も僕はあの長椅子の部屋に座っていたことになる。喉がひどく渴いている。昔話や歌の歌詞。小説やドラマや映画のセリフ。もうとづくにネタ切れだ。しゃべってもしゃべっても、ネズミは目の前から動いてくれない。ようやく下手に消えたかと思えば、直後に上手から次のネズミが現れる。

こちらの部屋に戻されると、僕は水をコップについて息もつかずに飲み干した。長い時間長椅子に座り続けたせいで、身体のあちこちが強ばっている。熱い湯に浸かりたい。いや、それよりも今すぐベッドに入って眠ってしまいたい。だが、今日ばかりは眠るわけにはいかない。「こゝ」から脱出する契機を見つけないならならぬ。もっと早くに行動するべきだったのだ。それなのに今日まで、僕は部屋に戻ると眠気に抗わずに眠りこけていた。最初のうちは「こゝ」から逃れたくなくて惰眠をむさぼっていた。今では「こゝ」を出たいのに、肩にのしかかってくる疲労のために眠らずにはいられない。

冷めた食事に手を伸ばし、少しだけ口に入れる。咀嚼するうちに食欲がわいてきて、結局半分ほどたいらげた。菓자에添えられていた小さなフォークを手に取り、枕の下に

突っ込んでからベッドに入った。枕に頭を乗せ、布団にくるまるとたんまぶたが重くなる。眠るわけにはいかない。それでも、この部屋を監視しているかもしれない奴には僕は眠っていると思わせなければ。眠ってはいけない。眠ってはいけない。眠ってはいけない。眠ってはいけない。……。

意識がぐうつと沈んで、また浮上する。浮上するたびに僕は時計を見た。午前一時七分、午前三時十九分、午前四時三十二分……。

最後に覚醒した時、時計は午前七時六分を指していた。もうこれ以上眠るわけにはいかない。僕は枕の下を探ってフォークを取り出し、それを左手で力いっぱい握り締めた。掌にフォークの先端が突き刺さり、血が滴る。額に嫌な汗がにじんだ。鈍い痛みが広がる掌をシャツに押し付ける。傷を舐めながら時計に目をやった。七時十分。時の流れが遅い。秒針をにらみつけているうちに、また眠気が襲ってくる。今度はフォークを左手の甲に突きたてた。思わず呻き声が漏れた。「誰か」に聞かれはしなかったか。いや、聞かれてもいい。僕の身体に「誰か」の指先が触れたら、僕は「誰か」の手を握りしめてやる。「誰か」にしがみついて、もう二度と離すまい。「誰か」が来る。もうすぐ、もうすぐ、「誰か」がここにやって来る。眠っている僕を起こさないよう、優しく抱き上げて長椅子の部屋に移動させるために……。

午前八時。緞帳が上がった。劇場の中央に、つぶらな黒い目のネズミが座っている。「誰か」は来なかった。どんな指先も僕の身体に触れなかった。まばたきしたと思っただら、もう僕は固い長椅子の上にあった。昨日の朝と違うのは、眠りへの抵抗の印に左手に無様な傷が刻まれていることだけだ。出口はない。入り口がなかったのだ。出口がないのも当然なのかもしれない。

ライトを浴びて、ネズミの目がきらきらと輝く。髭の先がふるりと震えるのをぼんやりと眺めながら、僕は自分が腰掛けている長椅子の表面をさすった。木肌が僕の体温でぬくもりを持ってきている。

今ならわかる。この長椅子が何なのか。僕の背丈と同じくらいの幅、仰向けに寝転がればびったり収まる奥行き。そして一センチずれたままの蓋。

これは棺桶だ。僕のための。そして僕の前には「誰か」のための。僕の後に来る「誰か」のための。僕は、言葉を最後の一言まで搾り取られ、食事にも菓子にもありつけなくなった時、この中に入ることになる。

その時が来たら、この蓋は開くだろう。時折僕の尻の下から合図を送っていた「誰か」が、僕を抱きすくめるだろう。冷たい掌が僕の腕を捉え、棺桶の中の暗闇に引きずり込んでくれるだろう。

「誰か」の屍の上に自分の身体を横たえて、僕もまた、次の到来者を待つ。この棺桶

の中で。決して僕に顔をさらすことなく、新しい名前をつぶやき続ける到来者を。僕は棺桶の蓋に頬を寄せて、蓋の上に座ったそいつの身体から伝わってくる温もりを感じ取ろうとするだろう。そいつの唇から漏れる、空気を震わす音の振動を懐かしむだろう。願わくは、その到来者が僕に分かる言語を話す者であることを。そうすれば僕も、到来者の独り言を傍受し、その意味を理解することが出来る。そいつが苦しんでいる時、「ルール」を破りそうになった時、尻の下から合図を送ってやれる。僕より前に「ここ」にいた「誰か」がそうしてくれたように。

「ここ」はこれまで言葉によって形成されてきた世界をひたすら解体して無に帰すための小部屋なのだ。目の前を横切っていくネズミたち。僕が覚えてきた言葉を持ち去っていく、小さな生き物たち。死体が無数の生き物に食われ、分解されていくように、君たちは僕の言葉を、僕自身を、解体させていく。

左手で拳をつくって、棺桶にがつんとぶつけてみる。できたばかりの傷口から、まだ固まっている新しい血が流れた。そつと蓋をさすると、血がこすれて刷毛ではいたようなシミができた。

そこにいるのか。一人分の棺桶に折り重なるように埋もれている、哀れな僕の前任者たち。ネズミたちに言葉を搾り取られ、最後の一言を口にして、君たちはそこに横たわっ

たのか。それでもまだ生きているのか。ただの一言も発せなくなっても。ひとかけらの食物も口にすることができなくなっても。まだそこから僕に合図を送る、それだけの力が残っているのか。言葉がすべて取り去られたその後にも。

尻の下にいる「誰か」に抱きしめられる瞬間を想像してみる。「誰か」の身体は耐え難いほどの腐臭を放っているだろうか。「誰か」の腕は、骨をむきだしにしているだろうか。それでいて、「誰か」の身体は空笛のような細かい呼吸を繰り返しているに違いない。自由にならない言葉の代わりに、ほんの少しだけ自由になる身体をひそやかに動かしているに違いない。

「誰か」に抱きしめられた瞬間、僕は「誰か」と一つになるだろう。棺桶の中で折り重なる無数の「誰か」と一つになって、「誰か」と僕の区別もなくなって、棺桶の中で今度こそ飽くことなくよんどんでいられるだろう。弾力のない冷たい皮膚、まだ肉を残した骨、腐れた土塊、そんなものに囲まれて。

そしてその時には、僕も次の到来者に自分の腕を差し伸べる。まだ見ぬ到来者を求めて僕は傷付いた左手を伸ばしてみる。それは何もつかまえない。今はまだ。ただ空をかくだけ。この左手が「誰か」の腕を捉える時、僕はもう僕ではなくなっているだろう。

僕は頭を振って、冷たく折り重なる無数の胸に顔を埋めたいという誘惑を断ち切ろう

とした。まだ早い。棺桶の中に赴く前に、僕にはまだできることがある。まだ傷のないこの右手は、今しばらく生きるために残しておこう。食物をつかみ、口に運ぶ、そのために。今なら異様に甘いあの菓子もむさぼれる。

ネズミたち。無邪気に言葉を持ち去っていく、膨大な数の生き物たち。君たちは僕から言葉を剥ぎ取り、僕を解体する。だが、それでも、それでも、解体する過程の中で新しいものが生み出される可能性までは消せないのではないか。

僕はもう、これまで覚えてきた言葉を消費することはやめよう。僕が紡いだ、僕だけの物語を語ろう。現れては去っていくネズミたち。君たちが僕の聞き手。君たちが僕の物語の読者。たとえ一節しか聞き取ろうとしなくても。たとえ君たちに与えた言葉が二度とふたたび呼び出されることがなくても。

最後の最後、本当に何も言葉が出てこなくなった時。もう棺桶の中でゆっくりと憩いたいと思った時。その時には、僕は自分の名前を最後のネズミにくれてやろう。僕が棺桶の中に潜り込んでも、僕の名前を持ったネズミが劇場を去ってどこかで生き続けるのなら、それもいいような気がした。

つぶらな黒い目のネズミを前に、僕は自分の物語を語り始める。終焉の小部屋の中で。「僕は固い木製の長椅子に座っている……」

そこまで聞いて、目の前のネズミは走り去った。また次の一匹が現れる。時計は律儀に針を進めている。ネズミはいくらでもわいてくる。ひとときも留まることなく。

村上陽子（むらかみ・ようこ）／人文社会科学研究科・国際言語文化専攻二年

琉球大学びぶりお文学賞 佳作

窓虎魚、猫人間
砂川 祐樹

部屋に唯一ある、内開きの窓は開いていた。窓の外では一昨日の夜から降り続けた雨が止み、入れ替わりに吹き始めた風がジメジメした重い空気を拭い去ろうとしていた。七月に入ったばかりだというのに、三日前には早々に梅雨明けが宣言され、それを合図にするかのようにみるみる力強くなった日射しが、窓から見える風景に強いコントラストを生み出している。私はベッドにあぐらをかいて座り、窓の外をほんの少し気に留めながら、手元の『世界の楽器図解』を眺めていた。枕元に置いてある水槽の換気ポンプから聞こえる、小気味良いポコポコという音に、ページをめくる音が時折重なる。

窓の方に小さな気配を感じて顔を上げると、ヨウゾが部屋に入ってくるころだった。とん、と床に飛び降りた拍子に、縁に置いてあった双眼鏡も一緒に落としてしまう。突如の大きな音に驚いたヨウゾは、飛ぶようにベッドの下に隠れてしまった。自業自得だ。少し笑って双眼鏡を拾おうとした時、視界の隅、窓の外に小さな影が現れた。

来た。すぐに分かった。慌てて双眼鏡を拾って覗き込む。二つのレンズを通して、若い男の後ろ姿が大きく映った。男はジーンズに緑のTシャツに黒のトートバッグという

シンプルな格好に、首から何かを提げており―おそらくカメラだ、しかもフィルムが必要な旧式の―路地の奥へ歩いていった。

この部屋の窓の前はやや広めの空き地になっていて、腰ぐらいまで雑草が茂っている。その右手に、この窓とは直角に路地が一本走っており、そのまた右手にかなり古くなつた家々が並んでいる。そのほとんどが一軒家であるのだが、このあたりはかなり寂れていて空き家も多い。そのためこの路地は昼間でも人通りは少なかった。

男はいつものように、ある空き家の前で立ち止まり、座り込んでごそごそとやり始めた。最初にその姿を見かけた時は、何をしているのか分からなかった。分かったのはそれから数日後。あの男が毎日あややつて、決まった時間に決まった場所にうずくまっている、ということに気が付き、こうして望遠鏡で観察するようになってからだった。

彼は写真を撮っているのだった。あの空き家の門に据え付けられた、少々サビの入つた奇妙な蛇口の写真を。毎日毎日、同じ時間に同じ蛇口の写真を撮り続けているのだ。何のために？ 俄然興味が湧いた私は、前にも増して熱心に彼を観察するようになった。窓の枠にもたれながらなおも彼の観察を続けていると、ヨウゾが私の脇を抜け、また外へ出て行った。

僕はすっかり見慣れてしまった道を歩いていた。狭い路地にもようやく風が吹いてき

て少し涼しくなる。参考書の入ったトートバッグが一瞬だけ軽く感じた。時計を見る。二時三十二分。予備校ではそろそろ三つ目の講義が始まる時間だ。

自分が特別じゃない、ごく普通の人間だと最初に気付いたのはいつだっただろう。中学三年、野球部最後の試合で九回裏一アウト満塁、逆転のチャンスにポテポテのセカンドゴロでダブルプレイに打ち取られ、最後の打席を終えた時だろうか。それとも小学四年の夏休み、一ヶ月もかかりきりで作った自信作の船の模型を先生に提出したものの、期待していたほどの反応は無く、友達もほとんど興味を持ってくれなかった時か。いや、それよりもっと昔、保育園で初めて同い年のガキ大将に泣かされた時かもしれない。僕は僕以外のほとんどの少年少女と同じように、多くの小さな挫折を経験し、人並みに幻想を持ち、人並みに現実を見るようになった。

細いT字路を左に曲がると、目的の空き家が見える。この空き家は一見何の変哲も無い空き家だが、一つだけおかしいところがある。それは蛇口だ。その蛇口は左側の門柱の、内開きの門扉の邪魔にならない場所に、路地と平行にいきつと生えているのだ。しかもその蛇口は異様に位置が低く、僕の足首ほどの高さに、下向きに固定されて備え付けられているのだ。これではホースを使うにも一苦労だろう。一体何のために作られたのか見当もつかない。そしてこの存在意義もあやふやな蛇口こそが、僕がこの空き家に通う理由だった。

蛇口のそばにしゃがみこみトートバッグを地べたにおいて、首から提げていたカメラを手に取る。ファインダーを覗き込んで蛇口を中心に持つてくると、慎重にシャッターを切った。上手く撮れている自信は無い。元々このカメラは、父が買ってきて家の片隅に放置されていたものであつたし、なによりこの三週間で撮りためた大量の蛇口の写真は、一枚も現像していないのだ。どんな風に撮れているかを確認もせずに、上手く撮れるようになるはずが無い。カメラマンになりたいなんてもちろん思ったことも無い。では何のために、浪人生が予備校をさぼってまで撮ってるんだと聞かれたら、答える自信が無かった。傍目から見れば受験勉強のプレッシャーからの逃避に見えるだろう。確かにこの行為は逃避だろう。自分の前に立ち塞がる壁を直視したくないがために、あさつての方向を見つめているのだ。僕はそんな自分が大嫌いだつた。

汗が一筋、顎まで垂れているのに気付いてファインダーから顔を上げた。ちようど雲が太陽にかかり日射しが弱まる。強い光に慣れきっていた眼が、ほんの少しの間世界を青白く染めた。ふと見ると、いつから居たのか、塀の陰に一匹のブチ猫が寝転んでいる。首輪はしていない。野良猫だろうか。何となくカメラを向けると、たちまち逃げ出し丈の低い草むらに入っていく。そして猫特有の仕草でからかうようにひよいとこちらを振り向いた。僕はその仕草に少なからず苛立ちを覚え、なんとしても撮ってやろうという

気持ちになった。猫は相変わらずこちらをじっと見つめている。慎重に近づいていき、シャッターを切ろうとした瞬間、またも猫は走り出し今度は民家の低い塀の上に音も無く飛び乗った。そしてまたこちらを振り向く。

僕はますますムキになり、カメラを構えつつゆっくりと追いかける。シャッターを切ろうとすると猫が奥に逃げていく。また追いかける。それを繰り返すうち、気がつく。猫は白い枠の窓の下まで逃げていた。窓は開いていて、猫はその中を不思議そうに覗いている。今だ。これまでに一番近い距離からシャッターを切る。とその瞬間、猫は窓に飛び込んでしまった。くそっ。思わず声を上げてしまう。

と、予想外の事が起きた。飛び込んだ猫と入れ替わりに誰かが顔を出したのだ。僕は驚き、慌てて身を隠そうとする。だがその人影がまっすぐにこちらを見つめているのに気付き、固まってしまった。細身の女性だ。まずい。ついつい入ってしまったが、もちろんここは誰かの私有地だ。何か言い訳をしなければ。体中からどつと冷や汗が出る。しかしそんな僕の混乱をよそに、さらに予想外な出来事が続いた。なんと、無表情だった女性がにっこりと笑い、僕に向かってひらひらと手招きをしたのだ。完全に意表をつかれた僕は、思わず窓のそばにフラフラと寄っていった。彼女が口を開く。

「ね、あなた、最近ずっとあそこの蛇口、撮ってるでしょ」

「……えっ？」

全く予想していなかったことを言われ、バカみたいにポカンと口が開いてしまった。
「ずっと見てたよ。もちろん今日も」

そう言つてケラケラ笑う。僕はなんだか急に恥ずかしくなってきました。密かにずつと書き続けてきた日記帳を、勝手に読まれた時のような気分だ。この場から走って逃げ出したいくなった。だが、彼女はそんな僕の気持ちなどに全く気付いていない様子で、眼を輝かせて聞く。

「ね、なんであんな蛇口なんか撮ってるの？」

当然の疑問。だが一番聞かれて困る質問でもある。

「……別に意味なんて無いんです。ただ、なんとなく」

「……ふーん」

不思議そうな顔で僕を見つめる。そしてまた唐突に言った。

「入って」

「……え？」

「何か話をしてよ。玄関はあっち。この部屋は入ってすぐ左のドアね。あ、私の名前はマリエ。あなたは？」

「……あ、えっと、高橋です」

「下の名前」

「満です。満足の満」

「そう、よろしく、満くん」

自分が言いたい事だけ言うと、マリエさんは奥に引込んでしまった。僕はしばらく呆気にとられていた。変な人だ。しかし、彼女には何か逆らいがたい魅力があるような気がした。いつもの僕には考えられない事であったが、思い切ってお邪魔する事にした。

虎。が、こちらを睨みつけている。ドアを開けて最初に入ってきた光景だ。一瞬驚いたが、すぐに剥製であることに気付く。部屋は六畳ほどで、外から見た印象よりも狭かった。板張りの床に、さっきまで追いかけていた猫が寝転んでいて、闖入者である僕をじっとにらんでいる。最初にマリエさんが顔を出した窓は入って左側にあり、白い木の枠で囲った素朴な造りの窓のとなりには、威風堂々と虎が鎮座しているのはとても異様だ。奥には古い本棚と机があったが、大量の本が乱雑に置かれているせいでほとんど使い物にならないだろうと思えた。部屋の右側、雰囲気のあるベッドの枕元には小さな水槽が一つ、青い色の小魚が何匹か泳いでいる。はつきり言ってまとまりのない部屋だ。

窓から外を見てみると、なるほど例の蛇口がよく見える。ふと縁に双眼鏡が置いてある事に気付いた。もしかしたらこれで見ていたのかもしれないな、と手に取った。

「それで見てたのよ。そこから」

いつのまにかマリエさんが麦茶の入ったコップを持って部屋の入り口に立っていた。

「毎日来るから興味が湧いちゃって」

改めて見ると、マリエさんも相当変わっている。くせつ毛でのばしっぱなしなせいでボサボサの髪、ヨレヨレのTシャツに七部丈のスウェットパンツ、どちらもゆるゆるだ。薄緑のTシャツなどはサイズが二つぐらい違うのではないだろうか。そしてクルクル動く大きな目と乾いた頬、不健康そうな青白い肌。化粧つけない年齢不詳の顔は二十代前半にも見えるし、また四十代後半だと言われても納得してしまうに違いない。

「それで」

マリエさんがベッドに、僕は奥にあったイスに腰掛けた。猫が急に起き上がって窓から出て行った。

「なんであんな蛇口なんか撮ってるの？」

「……なんとなくです。本当に意味なんて無いんですよ」

ついさっきの繰り返しのような会話。マリエさんは好奇心に満ちた目で僕を見つめている。

「……ただ現実逃避してるだけです」

「現実逃避」

マリエさんがますます目を輝かせて身を乗り出す。ベッドがギシリと音を立てた。

「聞かせてよ。満くんが逃げ出した現実の話」

僕は話した。合格確実と言われた地元の国立大学に落第した事。劣等感から大学生になった友人達とも疎遠になった事。そんな時に父の古いカメラを見つけた事。そのカメラを持って予備校から離れるような道を選んで歩いていたら、あの蛇口を見つけた事。マリエさんは時々相づちを打ちながら、興味深そうに、どこか楽しそうに聞いていた。なんでこんなことを今日初めて会った人に話しているんだろう、何度もそう思ったが、彼女に話を促されるとするりと話してしまふ。マリエさんには、僕が生きてきた世界の外に居るような不思議な魅力があった。

「……ありふれた話ですよ。受験のプレッシャーに耐えられなくて逃げ出すなんて」
「そうねえ」

マリエさんは相変わらず笑顔だ。

「でも、現実逃避で毎日同じ蛇口を撮り続けるなんてのはありふれた話じゃないわ」
またケラケラ笑う。よく笑う人だ。

「確かに」

「あ、笑ったね。今日初めて笑った」

言われて初めて気がついた。僕はつられて笑っていた。それを見てマリエさんが笑う。

またそれにつられて僕が笑う。笑うのもずいぶん久しぶりな気がした。

他愛も無い話をしているうちに随分時間が経ったらしい。窓の外を見ると、もう大分暗くなつてきている。

「そろそろ帰ります」

「うん。それじゃ」

僕はドアの前まで歩いたところで少し迷つてから、振り返つて言った。

「あの、また来ても良いですか？」

「ふふ、いいよ。もちろん。いつでも来て」

マリエさんはまた笑つて、まるで僕が言う事を予想していたかのように即答する。

「いつでもこの部屋にいるから」

その言葉を聞いて、何故か涙が出そうになった。慌てて、それじゃ、とだけ言つて逃げるように家を出る。少しだけ欠けた月がもう東の空に昇っていた。

それから二週間、僕はほぼ毎日マリエさんの家に通っている。蛇口を撮るのはやめてしまった。マリエさんの部屋でやることと言えば、ほとんどの場合は他愛のない話をするだけだったが、最初は謎だらけだった彼女のことも段々分かつてきた。

マリエさんの年は三十六。十三の時に両親を事故で亡くし、優しい親戚の家で育てら

れるが、高校卒業と同時に家出。アルバイトで食いつないでいるうちに夜の世界に入り、二十歳の時にヤクザの幹部に見初められて内縁の妻となる。間もなくその幹部が抗争によつて死んでしまうと、その家の金目のものを掻き集めてまた家出。三十歳まで普通のOLとして働き、その間に結婚。が半年持たずに離婚し、その時に初めて、自分が女しか愛せない事に気付く。ヤクザと関わっていたことが会社にバレてクビになった後、育てくれた唯一の親戚を頼るも家のあつた場所は既に高速道路になつてしまつていて、途方に暮れていたところ、ある女性と運命的な出会いを果たし、その女性の家、つまりこの家に転がり込んで現在に至る。そしてこの部屋に住み始めてからは働かず、ただの一步も外に出ていない、らしい。

まとめるならマリエさんは、天涯孤独で、元極道の妻で、バツイチで、レズビアンで、無職で、ヒモで、引きこもりの、三十代半ばの女性だという事だ。いよいよ持つて変人だ。そんな人生を送つた人間が、あんな風に笑えるものだろうか。正直なところとても信用できなかつたが、しかし何度マリエさんに聞き直しても、本当よ、と言つて小さく笑うだけだったので、僕はこの信じがたい話を信じることにした。ウソだったとしても別に良いと思えたからだ。

「この虎は一体どこから持つてきたんですか？」

前から気になっていた疑問をぶつけた。マリエさんが水槽の魚達に餌をやりながら答える。

「これはね、ヤクザの人の家にあつたの。持って逃げるときは大変だったんだから。台車に乗せてさ」

マリエさんらしいメチャクチャな話だ。台車に乗った虎を一生懸命運んでいる姿を想像して、思わず吹き出す。

「虎よ、虎。カッコいいじゃない。虎」

まるで男子小学生みたいな弁明をする彼女に、ますます笑いがこみ上げる。

午後5時半過ぎ。予備校では夜間部の授業が始まる頃だ。外は僕が初めて来た日のように晴れ。徐々に日の光が弱まり、空に赤い色が混じり始めていた。麦茶の入ったコップは汗をかいている。

不意に、窓から何者かが飛び込んで来た。そしてそれと同時に、ビビビビビビビビ、というけたたましい音が部屋中に響く。飛び込んできた影は……ヨウゾだ。音の正体はヨウゾが口にくわえているセミだった。そこらの植木にでも登って捕まえてきたのだろうか。小さなハンターは誇らしげに僕とマリエさんを見ている。

「セミだ！」

マリエさんが目を輝かせながら、ベッドから跳ねるように立ちあがった。本棚に駆け

寄り、何かを探している。しばらくして、机に積み重なった本の山から掘り出したものは、『日本のセミ凶鑑』だった。

「偉いぞーヨウゾ。偉い偉い」

床に座り込んでヨウゾを撫でながら、楽しそうに凶鑑をパラパラとめくる。まるで、ではない。もはや男子小学生そのものだ。

「結構でかい……、あ、アカエゾゼミだって。アカエゾゼミ」

凶鑑のスケッチを指差しながら、少年の目をこちらに向けてくる。不思議な人だ。母親のように受け止めてくれたかと思ったら、子供のように勝手に走り出す。

その時、玄関のドアが開く音がした。続けて、ただいま、という声。美枝子さんだ。

美枝子さんはリエさんの恋人で、この家の家主だ。つまり、六年前にリエさんと運命的な出会いを果たしたという女性である。

「お帰り、今日は早いね」

部屋から顔を出してリエさんが言う。

「うん。今日は仕事が少なくて。帰ってきちゃった。あ、満くん、こんにちは」

リエさんの肩越しに挨拶をする。美枝子さんは二十九歳という若さで骨董品を扱う店の支店長を務めていて、外見からも仕事の出来る人特有のオーラのようなのが伺えた。メタルフレームのメガネをかけ、パンツスーツでビシッと決めたスマートな姿は、

マリエさんとは正反対だ。二人の時間を邪魔しては悪いと思ひ腰を上げると、マリエさんに

「まだいるでしょ？一緒に夕ご飯食べていかない？今から作るんだけど」

と誘われてしまい、また腰を下ろした。

やたら肉の多いビーフシチューを食べながら三人で食卓を囲む。どうやらこのシチューには牛肉、豚肉、鶏肉が全て入ってるらしい。

「凄いですね。肉」

「私が肉が好きなの。この人はあんまり食べないんだけど」

美枝子さんが答える。

「そうよー。本当はもつと全体的に緑色にしたいのに」

「前に一回好きに作ってもらったらさ、すごい緑色の、グリーンカレーみたいなシチューになっちゃったのよ」

「いいじゃない、グリーンシチュー。みえちゃんももつと野菜を食べなさい」

「野菜なんてボンボン食べても何にも楽しくない！」

「野菜もおいしいのに……」

二人は楽しそうに言い合っている。お互いが深い信頼関係で結ばれているのが分かる。七つの年の差もほとんど感じさせない。二人で過ごした膨大な時間がそうさせているの

だろうか。

マリエさんと美枝子さんは、端から見ると全く接点の無さそうな二人だ。マリエさんが全体的にだらしなくゆるんだ雰囲気であるのに対して、美枝子さんは部屋着に着替えてもきつちりと整っていて、几帳面さがにじみ出ている。性格も勝気だ。この二人が、何故一緒になったのだろう。

「文句があるならみえちゃんが作つたらいいのよ」

「嫌よ。料理って大変じゃない。精神的に疲れるし」

「それはみえちゃんがいちいち調味料の分量を計つたりするからでしょ。そんなの適当でいいの、適当で。みえちゃんはいつも神経質すぎるよ」

「そうよ。神経質だから私は料理しないの」

二人はまだじゃれあっている。家計を支えているというのもあつてか、美枝子さんの方が優勢であり、いつもの二人の上下関係も、大体的場合、同じように美枝子さんが強いようだった。

八月が終わろうとしている。僕はほとんど毎日マリエさんの部屋に通った。予備校には全く行っていない。あの部屋で、猫って何で逃げた後こつちを振り向くんだろうね、とか、雨が降ってない時のカタツムリはどこにいるんだろう、とか、くだらない話ばかりをした。マリエさんはいつも部屋のベッドに腰掛けていて、お邪魔します、と僕が言

うと、いらつしやい、と柔らかく笑うのだった。たまに美枝子さんが早く帰ってくると、三人で夕食を食べた。そして、意外と人使いの荒い美枝子さんに言われて、模様替えを行った。二人は模様替えが好きなようで、僕が通うようになってから、既に三回も家具の配置は変わっていた。美枝子さんは、満くんがいてくれて助かるわ、と言い、二人できやつきやと楽しそうに、その食器棚はあっち、あのテーブルはこっち、と指示を出した。

台風が接近しているらしい。湿ってほのかに冷たい、独特の強い風が吹いている。その日のマリエさんは具合が悪そうだった。元々青白い顔が、こころなしかいつもよりさらに青白い気がする。

「大丈夫、多分ただの風邪だから。毎年この時期になるとかかるの。ほら薬も飲んだし」
遠慮して帰ろうとすると、そう言って僕を引き止めた。

二人分の紅茶を入れて部屋に戻ると、マリエさんはベッドに横たわりながら窓の外を眺めていた。ヨウゾが足下で丸くなっている。

「段々風が強くなってきたね。どうやって帰るの？」

自分で引き止めておいて、あつけらかなと聞く。確かに風は強くなっていて、時折窓がガタガタ揺れる。

「どうにかかりますよ。まだ雨も降ってないみたいだし」

そう答えた途端、雨がパラパラと降り始め、窓を濡らした。

「あら」

「あ」

思わず顔を見合わせて、笑ってしまった。

「台風が近づいてくるとなんだかワクワクしません？」

「するね。すごくする」

「風の独特の匂いとか、街がいつもよりざわざわしている感じとか」

「食料とかろうそくとか買い込んで」

「朝は、風の音で目を覚ますんです」

「遠足の朝みたいな気分だね」

まるで内緒話をしているかのように、クスクスと小さく笑う。

「なんでこんなにワクワクするんでしょうね」

わずかに考えるような間があつて、マリエさんが言った。

「……ちっちゃい頃、友達と隠れんぼをすると」

うなずく僕。マリエさんは話を続ける。

「いつとも私は最後まで見つからなくて、結局自分から出てく事になるの。人が探さな

いような場所を見つけるのが何故だか上手かったし、好きだったのね」

ヨウゾがあくびをした。風が窓を叩く。

「特に押し入れがお気に入りで、家の中で遊ぶ時はよくそこに隠れて遊んでたわ。押し入れの中は狭くて、暗くて、誰も来なくて、とつても安らげる場所だった。よく、駄菓子屋で買ったお菓子を持ち込んで、こっそり食べた。何か嫌な事があってもその押し入れを想うと、耐える事が出来た。台風が来る前の日の気分は、その時の気分似てる。家全体があおの押し入れの空気で満たされるような気がするの」

薬が効きはじめて眠くなってきたのか、遠い目をしながらマリエさんは語った。僕はなんとなく、小さい頃のマリエさんがこの部屋で無邪気に遊んでいる姿を想像していた。子供のマリエさんは虎の剥製とひとしきり戯れた後、今度は水槽の魚を嬉しそうに眺める。ガラスをコンコン、と叩くと、魚達がサツと逃げた。そして窓の縁に置いてあった双眼鏡を手に取り、頭を半分だけ出して用心深く外の様子を伺った。

「台風が通り過ぎたら、一緒に外を見て回りませんか？」

「え？」

「台風の後の街を見て回るのが好きなんです」

「……遠慮しとくわ。私は」

そこで言葉を切った。

—外に出たくないから—

きつとそんな言葉が後ろに隠れているのだろう。僕は急に、今まで何度も浮かびながら聞けずにいた疑問の答えを知りたくなつた。マリエさんの深淵に触れてしまいそうで、恐ろしくて口に出せなかつた問い。

「どうしてマリエさんは、外に出たがらないんですか？」

いつもより弱々しいマリエさんの大きな目が、僕をまっすぐに見つめた。悲しいような嬉しいような、意地悪な友達に泣かされた子供が、親に何故泣いているのかと聞かれたときのような表情。まるで部屋の時間が止まったように感じる。部屋には水槽の空気がポンプのポコポコという音と、さらに強くなつた雨が窓に打ち付ける音だけが響いた。ヨウゾは死んだように眠っていて、ピクリとも動かない。

やがてマリエさんが静かに口を開いた。

「満くんは外国に行った事ある？」

意外な質問に戸惑いながら、無いです、と答える。

「……この地球にさ、生まれてから死ぬまで、自分の生まれた国から一步も外に出ない人って、どのくらいいると思う？ 生まれた街から出ない人は？ 生まれた村から出ない人は？ 一生、生まれた部屋から出ない人は何%くらいかしら？……例えば世界中を歩き回った旅人と、小さい街の小さい雑貨屋で一生を過ごした人と、どっちが幸福だと思

う？……ふふ、そんなの決められないわよね。井戸の中にいたカエルだって、海に出なければ幸せだったはずよ。自分が住む世界の広さなんて、自分で決めちゃえばいいの」
すっかりぬるくなってしまった紅茶を飲み干す。

「ここにはみえちゃんもいる、本もたくさんあるしヨウゾもいる、カッコいい虎や可愛い魚達もいてくれる。窓から外も眺められる。この窓があつたおかげで満くんとも出会えたしね。この部屋は私にとって理想の世界。足りないものもたくさんあるけど、世界ってそういうものよ。私は、私が、この世界に住むと決めたの。だから、外には出ない」

言いたい事を言い切ると、マリエさんは大きく息をついた。頬がほのかに紅潮している。僕は何も言えなかった。納得できない部分もいっぱいあつたが同時に、宇宙が音を立てて碎け散って、その外側にさらに巨大な宇宙が現れるような痛快さも感じた。そしてまた、マリエさんの世界はマリエさんにしか変えられないのだ、という薄暗い絶望感も、胸の片隅に残った。

「……理解はできました、納得はできないけど」

マリエさんは、ありがとう、と、さわやかに笑った。その日のマリエさんはいつもより饒舌にしやべり、七時過ぎに眠った。魚達には僕が代わりに餌をやった。

「あ、もう寝た？」

マリエさんが眠ったので、キッチンでマグカップを洗っていると美枝子さんが帰ってきました。

「ついさつき眠りました。外、強いですか？ 雨」

「今はちよつと弱いかな。ごめんねー、どうせあの人が無理に引き止めたんでしょ」
スーパ一のビニール袋をテーブルに置いて、美枝子さんは奥の部屋に消えた。

「紅茶飲みますかー？」

奥から、おねがーい、と言う声。

「いいんです。どうせ雨で帰れないし」

部屋着になって出て来た美枝子さんに、マグカップを渡す。

「具合悪そうだった？」

「ちよつと元気は無かったですね。でも薬も飲んで今はよく眠ってます」

「治ったら、一回ぐらい作ってもらってもいいかしら。グリーンシチュー」

意地悪そうに笑う。自分が作ってやる、とはならないのが美枝子さんらしい。

「喜びますよ。きつと」

「あの人、いつつもこの時期に風邪ひくのよ。どうしてかしら」

あきれたように呟くが、むしろ少し嬉しそうな顔をしていた。

「私たちが出会ったのもこの時期で、その時も風邪をひいてた。その時私が働いていた

店の向かいにベンチがあつてね。鼻水すすりながら、そのベンチにずーっと座ってるの」

「……そういえば、マリエさんの生い立ちって、あれ、本当の話なんですか？」

「少なくとも私と出会ってからはね。信じられない？」

「そんなことは無いですけど……」

「私は本当の話だと思う。きつと、あの人はたくさん嫌な事や辛い事に会って、逃げる場所も失って、あのベンチに座ったのよ」

そして理想の世界を手に入れた今、そこに逃げ込んで隠れているというのだろうか。それは卑怯な事ではないのだろうか。

「逃げるって、卑怯だったり悪い事じゃないのよ」

「え……？」

僕が考えている事を見透かしたかのように、美枝子さんが優しく、それでいて強く言う。

「辛かったり苦しかったりしたら、逃げちゃってもいい、殻にこもっちゃってもいい。

そんな事すら出来ない臆病な人達が色々言ってくるだろうけどね」

マリエさんが美枝子さんと一緒にいる理由が分かったような気がした。美枝子さんは、強い。それも、決して曲がらないという強さではなく、曲がっても歪んでも、決してポキリと折れないという強さ。傷つき歪む事を恐れない強さ。

「あの人は、その事をよく知っている。私はあの人のそういうところを好きになった。君だって、そうでしょ？」

美枝子さんが意地悪そうに笑った。雨は一旦止んだようだ。外からは風の音しか聞こえない。

南から北に抜けるはずだった台風は、僕の街の上空で突如進路を変え、東に抜けようとしていた。そのために僕は結局、丸二日家に閉じ込められることになった。ゴロゴロしているうちにもう夕方だ。外は雨が上がって、風も弱まりはじめている。

携帯電話が鳴った。マリエさんからだった。電話をかけてくるのは初めての事だ。驚きながら、もしもし、と言った。マリエさんは僕の挨拶に小さく、うん、とだけ答えて沈黙した。胸がざわざわして、嫌な予感がした。やがてマリエさんが意外なほど冷静な声で言った。

「みえちゃんが死んじゃった」

マリエさんはいつものようにベッドに腰掛けていた。いつもと違うのは、明かりをつけてないので家が薄暗い事と、泣き腫らした跡がマリエさんの顔に残っている事だった。美枝子さんは今日の朝、雨が弱くなってきたのを見てスーパーに買い物に行き、濡れ

た道路でスリップした乗用車に撥ねられたらしい。病院から連絡が来た時には、もう息がなかったそうだ。

「……病院には行かないんですか」

「……うん」

腹が立った。大切な人の死に顔も見ないというのだろうか。

「何ですか？ 恋人だったんじゃないんですか！？」

「……うん」

「そんなにこの部屋が好きなんですか！？ 理想の世界とやらが大事なんですか！？」

「……」

突然、この人は行かない、そう確信してしまった。この人は自分の世界にこもって耐える事を選ぶのだ。そしてもし美枝子さんが生きていても、美枝子さんはそれを許すに違いなかった。

僕は息を荒げたまま床に直接どざりと座った。マリエさんはベッドに足を抱えて座り直す。

「……行かないんですね」

「……うん、行かない」

強い返事だった。鋼が芯を通っているかのような、しなやかでありながら強い返事だっ

た。マリエさんの世界はマリエさんにしか変える事は出来ない。何日か前にも味わった絶望感にまた襲われた。

「……お葬式とかはどうするんですか」

「向こうの実家でやるみたい。みえちゃん、私の事はただのルームメイトとしか言っていないはずだから」

そうですか、と力なく答える。外では太陽が沈んで、部屋はじわじわと暗闇に浸食されていく。

電灯をつける気にもならず、もうマリエさんの顔も見えない。時折鼻をすする音が聞こえた。

「美枝子さんは幸せだったと思います」

マリエさんは何も言わなかったが、顔を上げた事は分かった。

「マリエさんの事を話している時の美枝子さんは、すごく楽しそうでした」
ベッドがぎしりと唸る。

「慰めないで」

「……え？」

「せっかくなこの人生最大級の悲しみを味わってるんだから。悲しくなくさせないですよ」
衝撃が走った。そして次に、とても不謹慎なことだが、愉快な気持ち湧き上がった。

愉快で、それでいてこの上もなく哀しい気持ち。きつとマリエさんにとっては、喜びも悲しみも等しく大事なのだ。そしてそれをお気に入りの場所に持ち込んでじっくり味わう。思い切り笑えるようになるために、思い切り泣くのだ。頭の中に、押し入れですすり泣く子供のマリエさんが浮かんだ。目の前のマリエさんも泣いていた。

台風は去り、雲もどこかへ去ったらしい。満月の光が窓から差し込み、マリエさんの顔が照らされた。

僕に出来る事はなんだろう。僕に出来る事は。目の前で泣いている人に出来る事は。

「美枝子さんは」

意を決して言う。

「多分グリーンシチューの材料を買いに行つたんです。風邪が治つたら作ってもらつて言つてましたから」

マリエさんの目が驚いたように丸くなった。そしてまた大粒の涙がぼろぼろとこぼれ落ちた。

「悲しいね。それはとても悲しい」

「事故に遭う直前まで、グリーンシチューを食べながら何を話そうか、考えてたと思いません」

「ああ、それも悲しい」

マリエさんが顔をくしゃくしゃにする。気がつくとも僕も涙を流していた。

とても信じられないだろうが、僕は何故だか、こうすることがマリエさんの望みだと確信していた。僕は一晩中、マリエさんが悲しくなるような話を続け、彼女は涙を流し続けた。月光でたまにきらりと涙が光った。

夜が明ける。外を明け方独特の、青い光が満たしていく。マリエさんは既に泣き止み、窓の外をただ眺めている。

「これからどうするんですか」

「わからないけど、まだもう少しばかりはこの家にいられるはずだから。これから考えるわ」

家主だった美枝子さんはもういない。理想の世界を失って、これからマリエさんはどこへ行くのだろうか。生きていくことができるのだろうか。

「外に出なきゃね。そろそろ」

そう小さく呟いた。そうだ。出る時が来たのかもしれない。いつまでも押し入れに隠れているわけにはいかないのだ。もちろん、この僕だって。

「そろそろ帰ります」

半日ぶりに腰を上げる。板張りの床がぎしりと鳴った。

「満くん」

「はい？」

「……やっぱりいいや。元気でね」

何を言おうとしたのだろうか。でも、マリエさんが言いたくないのならそれでいいと思っただ。ドアに手をかける。

「満くん」

「なんなんですか」

笑いながら振り返ると、マリエさんも泣き腫らした顔でにっこりと笑う。

「またどこかの、窓のある部屋で」

玄関のドアを開けると、青かった世界がいつの間にか金色の光で満ちていた。いよいよ朝日が昇るらしい。

砂川祐樹（すながわ・ゆうき）／工学部情報工学科四年

講
評

期待される新人たち——「びぶりお文学賞」講評——

仲程 昌徳

前世代の作家たちを論じ、『琉大文学』を不朽のものにしたといえる第六号、学生作家の登場だとして中央の雑誌にも転載された作品が発表された第七号等が刊行されたのは一九五四年。今から半世紀も前のことである。

「びぶりお文学賞」は、五十数年前の『琉大文学』の栄光を受け継ぐものたち、そして琉大を卒業していった作家たち——芥川賞を受賞した又吉栄喜、目取真俊、何度か芥川賞の候補にあがった崎山多美、具志川市一千万円懸賞小説その他を受賞した大城貞俊といった俊秀につづく有望な新人たちを発掘したいという大きな希望があつて創設されたものである。

今回、その希望に応える有望な新人は登場したかということになると、否とも応ともいい難いが、なにはともあれ、書きたいと思う者が数多くいることだけは確認することができたし、後は、当人が書き続けていくことができるかどうかにかかっているように。

前置きが長くなったが、佳作三編と受賞作一編について簡単に触れておきたい。まず「コルネリアの幽霊屋敷」から。「百年以上も経っているらしい」屋敷で起った出来事を書いたもので、メルヘンといつてもいいような作品。

最初に屋敷に踏み込んできたのが子供たちその後数人の大人たち、吟遊詩人、神父たちと続き再度吟遊詩人の登場となる構成の巧みさは、物語の山場をよく知っていることを示すものであるが、少し常套過ぎた。優しいことは大切だが、小説にはそれだけではないものも必要だということである。

「窓虎魚、猫人間」という一見奇妙な題名は、作品を彩る物たちをただ並べただけで、面白いとも言えるし陳腐だともいえる。作品も同様で、マリエさんの来歴など陳腐そのものだし、美枝子さんの死などあまりに安易につくり過ぎていっていいだろう。そのような欠点はあるが、予備校に行くことを止めてしまったものと引きこもりの女性との交感には、心を動かされるものがある。それは何事かから逃げている者たちを決して非難することなく、温かい眼差しを向けているところから来る。その眼差しは作られたものではないはずだ。

会社に出ることが嫌になつて辞表を出したことで、ありあまるほどの時間がありながらやりたいこともない人間に訪れた奇妙な仕事。「名付け」は、その奇妙な仕事——毎日、百もの名前を考え出さなければ「飢え死に」してしまうという生き方を強いられた人間を描いたものである。男は「名付け」ることを請け負つたものの、まさしく鼠算的に湧き出してくるネズミたちに名前を与え続けていくことは「言葉を削り取り取られていく」ことであり自己の「解体」を余儀なくされることだと気づくと同時に、新たな認知の誕生が其処には指し示されていて、一種の物語論ともなっている。理に落ちる難点はあるものの、充分に力量を感じさせる一編であった。

受賞作「あおい海の目で」は、休みで島に戻ってきた拒食症の大学生と子供を海で亡くした元外国語教師との心の触れ合いを描いたものである。ともすれば過度な情感の流露に走つてしまいがちでありながら、特に嫌味を感じさせない。「目の色が青くなつた」云々の部分など、ぎりぎりといったところだろう。受賞作がいいのはそのような箇所ではなく「私もモヤシに手を伸ばす。ぼきん、」といった箇所などである。それは絶妙な感性を有していることを示してくれる描写であり、そこに潜む大きな可能性を買つての受賞といえた。

入選した四編をはじめ応募作全般の傾向とでもいえるのを一言でいえば、かつて盛んに論じられた「内向」が、際立っていたということであろう。「内向」も大切だが、若者には少々羽目をはずしても「外部」との格闘が似合うのではなからうか。

(琉球大学法文学部教授)

びぶりお文学賞講評

山里 勝己

琉球大学は戦後沖縄文学の一つの拠点であった。五〇年代の『琉大文学』が沖縄の文学に与えたインパクトは大きなものがあり、同人たちの仕事はいまでも高い評価をうけている。また、卒業生の又吉栄喜や目取真俊が芥川賞を受賞するなど、琉大は小説においては国際的なレベルで評価され、研究される書き手を生み出した。また、詩や演劇においても、琉大卒業生が山之口獯賞や演劇関係の賞を受賞するなど、琉球大学の学生たちは戦後沖縄の文学をリードしてきたと言える。

個人的な記憶で言えば、おそらく八〇年代あたりに琉大キャンパスから文学活動が消えていったように思う。だから、今回のびぶりお文学賞の公募にさいして、はたして応募者がいるかどうかを心配する声さえあった。しかし、三〇編を越える応募は、驚きであると同時にたいへん喜ばしいものであった。琉大の文学の水脈がとだえることなく、いまでも豊かに流れていることが確認できたからである。

入賞作品はいいレベルの作品が揃ったと思う。それぞれに可能性と欠陥をかかえているが、第一回の受賞、佳作作品としては文章、構成、テーマなど、それぞれに読み応えがあった。学外の文学賞など、さらなる高みへの挑戦を期待したい。

残念ながら受賞に至らなかった作品について言えば、まずはなによりも小説を書く目的をしつかりと確認することから再出発してもらいたいと思う。自らの想像力を自由に飛翔させる喜びは作品から感じられるが、それが読者の共感を得られるものになっているかどうかは

別の話だと思う。たとえば、極端な例を言えば、視点（誰が物語を語っているか）という基本的なことが理解されてなく、小説が混乱をきわめているものもいくつかあった。あるいは、表現が独りよがりになっているもの、小説の基本的な構成ができてなく、エッセイなのか単なる日記的な独白なのか、判断に困るものもあった。

受賞作や佳作作品とそうでないものの大きな違いは、おそらく読書量の違いからくるものでもあるだろう。小説とはなにか、小説はどう書くか。多くの作品を読みながら基本を学んで欲しい。そして再度挑戦してもらいたい。

（琉球大学法文学部教授）

第一回目の審査を終えて

村上 呂里

まずは第一回目の賞にあたって多数の応募作、それも労作が寄せられたことに、あらためて敬意を表したいと思います。

「あおい海の目で」は、どこまでも澄んだ海の藍色と、深い哀しみを湛え、喪われたかけがえのない存在を見つづけようとするおじさんの目とが響きあい、いつまでも余韻が残る。すこやかな叙情性を感じさせる作品である。結末部分「おじさんの姿を見てこんな風に泣けることをとでもうれしく思った。」とあり、語り手が「私」を対象化することなくやや自足的になり、少女の〈癒しの物語〉の内に、おじさんの少女の認識を超えたところにある他者としての歴史が回収されてしまった点が残念である。語り手が「私」を見つめつつ、おじさんの他者性と厳かに向きあう視点を得たならば、もっとすばらしい作品になったのではないだろうか。会話のことばづかい（語り口）にも意識を及ぼしてほしい。「名付け」は、応募作の中で最も批評性を孕んだ構想力を感じさせる作品であったように思う。人間がつくりだした実体なきものが限りなく自己増殖し、人間を支配し閉塞し、やがて必然として解体に導いていく。あらがえぬ恐怖が、「ネズミ」という設定によって身に迫ってくる。ただし「名前」には「意味」が必要なのに対して、「ただの数字や記号、音ではダメなのだ」という対比については疑問が残る。生み出された「名前」と「記号」あるいは「音」とは、どのように異なるのか。「解体」から「僕」を解き放つ「名付け」Ⅱ「ことばの力」はありうるのか、ありうるとしたらどんな力なのか、言語論的にもう少し掘り下げてみるとさらにおもしろい

と感じた。「窓虎魚、猫人間」は、書き出しの部分「私」（マリエ）の視点から、つぎの場面で「僕」に転換されるが、その後は「僕」の視点のまままで終わる。前半の視点の転換という技法が、題名と絡めながら結末部分で活かされてほしかった。ひきこもりのマリエさんの過去の設定はたしかに陳腐であるが、そこに並べられた形容句は「記号」でしかなく、生々しさを消去するための技巧と筆者はとらえた。生々しさを消し去ったところに残る、そこはかとないぬくもりがこの作品の味わいであるように感じる。「コルネリアの幽霊屋敷」は、折々にはさみこまれた二行の独白や吟遊詩人の登場や後半の種明かしなど、巧みな構成力を感じさせる。だが、コルネリアの生きた跡の設定に深みがなく、独白や構成を活かす豊かな読後感が生まれてこない点が残念であった。選からは漏れたが、「ひまわりは芽が出たばかり」が印象に残った。沖繩の戦後史と深く関わりあう夜間中学に通う母を描きだしたものである。母をいったん対象化し、別の視点や時空から母の歴史を映し出すなど、多層的に「母」と「夜間中学」の巡り会いの意味するものを描きだしてほしかった。「南溟」は、移民という近代沖繩史で重要な主題をあつかっていた。労作だと思うが、エピソードを盛りこみすぎという観を否めない。

以上、読み込み不足な面が多々ありますが感想を述べました。文学を紡ぎだす時間にこれだけの方が向きあってくださったことをとてもうれしく思いました。一方で全体に、やや自足的と思われる作品が多かったという印象も否めません。他者にひらき、批評性を孕んだ作品の登場をさらに期待したいと思います。

（琉球大学教育学部教授）

びぶりお文学賞選考経過

びぶりお文学賞は平成十九年五月中旬から十月三十一日までの間募集し、三十一編の応募があった。学部ごとの内訳は次のとおり。

法文学部 十四編／教育学部 一編／理学部 四編／医学部 四編／工学部 三編／大学院人文社会科学研究所 三編／大学院理工学研究科 二編

一次選考で次の十一編の作品が残った。(順不同)

南溟(赤嶺秀光・法文学部国際言語文化四年(夜間主))／木漏れ日に(野中まなき(本名:宮城まい))・法文学部総合社会システム経済学専攻四年)／変化(石橋覇・理学部海洋自然科学四年)／コルネリアの幽霊屋敷(大谷凜(本名:親泊さやか))・法文学部人間科学科二年)／サイダー(竜彰・医学部医学科三年)／宿り木の人(霧谷トヲル(本名:久田論))・法文人間科学二年)／窓虎魚、猫人間(砂川祐樹・工学部情報工学四年)／名付け(村上陽子・人文社会科学研究所国際言語文化専攻二年)／友媒花(黒坂洋平・理工学研究科博士課程三年)／ひまわりは芽が出たばかり(瀬長恵・人文社会科学研究所総合社会システム専攻二年)／あおい海の目で(山原みどり・法文学部国際言語文化学科三年)

この十一編について、十一月二十二日の選考会議において最終選考を行い、既発表の通り、受賞作と佳作を選出した。

選考委員会で最初から全員一致で受賞作を出せればよかったが、そうはならなかった。三編が受賞候補点となり審議を重ねた結果、山原さんの「あおい海の目」が受賞作となった。受賞作について、文章を詩的な感性が支えていて今後が期待できるとの評価があった。受賞作と佳

作、佳作と入選候補作との間にたゞよう紙一重の差。受賞作を一発で決めるような強烈な作品があつてもよかつたというのは選考委員会で出た委員の感想と期待である。

活字離れ、読書離れと言われるが、一つの大学で実施した文学賞に短期間募集でありながら三十一編も集まつたというのは、講評にあるとおり、琉球大学生の文学活動への水脈が連綿と続いているという証明であろう。二名の芥川賞作家の輩出はいうまでもなく、かつての学生サークル雑誌『琉大文学』が沖縄文学活動のリード役を果たしてきた精神は今も琉球大学の学生に受け継がれているはずである。沖縄という地域はローカルでありながら普遍性を目指すことが可能な場所といわれる。沖縄の持つ歴史と風土はただのローカルではない。他県から沖縄は文学の素材がごろごろしていて羨ましいともよくいわれる。この文学賞創設がそういう地域の特性を生かして沖縄に在する琉球大学生の言語力の涵養と青い感受性に刺激を与え、新たな現代文学を生み出す契機となることを期待したい。

(松原敏夫・琉球大学附属図書館専門員)

君も未来の芥川賞作家

本学はこれまで2名の芥川賞作家を始め文学各界で活躍する人材を多く輩出してきた大学です。

今年は琉球大学の文学活性化をさらに図るため文学賞を設けました。現代を切り開く意欲的な作品をお寄せください。

募原
集稿

本学が基本目標として掲げる「地域及び広く社会に貢献する人材」「意欲と自己実現力を有する人材」育成の一環として、言語力(読む力、書く力)を向上させ、想像力、表現力、創造力豊かな学生を育成するとともに、文学の啓蒙活動を高め、地域社会における文学・文化活動のリーダーを輩出する。

募集〆切 平成19年10月31日
発表 平成19年11月30日(予定)

受賞作1編 → 欧米往復航空券+ 滞在費補助(5万円)
もしくはノート型パソコン(15万円相当)
佳作3編 → 1編につき図書カード5万円分

琉球大学

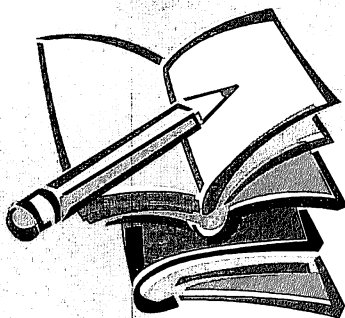
びぶりお文学賞

[選考委員]

仲程昌徳(法文学部教授)

山里勝己(法文学部教授)

村上呂里(教育学部教授)



応募要領

- ジャンルは小説とする。
- 応募資格
本学の学生(大学院生、留学生を含む)。
- 応募方法
①入 1編
応募原稿は未発表作品に限る。(同人誌などにすでに発表したものは選考の対象外とする。)
原稿枚数は、1ページ30字×40行、17枚(400字詰め原稿用紙50枚相当)以内、A4版縦長用紙にタテ書き、10ポイントのフープロ文字で印字する。
必ず通し番号(ページ番号)を入れて右肩を閉じる。
必ず1枚目にタイトル、氏名を明記する。ペンネームも可。
原稿の末尾に、住所、電話番号、氏名(本名)、学部・学科(大学院の場合は研究科)、学年を付記する。(個人情報には応募に関する連絡以外には使用しない)
●応募原稿は返却しない。
- 送付先および問い合わせ
琉球大学附属図書館情報サービス課(担当:松原) 〒903-0214 沖縄県西原町千原1番地
電話 098-895-8607 mail: toshio@lib.u-ryukyuu.ac.jp
- 受賞作品は、図書館報「びぶりお」と図書館ホームページに掲載する。
- 専業の主管部局 附属図書館
ホームページ <http://www.lib.u-ryukyuu.ac.jp>

※欧米往復航空券は、沖縄から目的地(1ヶ所)までのエコノミー割引(15万円以内)就航券となります。

発掘された琉大文学の水脈
第一回琉球大学びぶりお文学賞受賞作品集

発行日 二〇〇八年三月一日

編集 琉球大学附属図書館

発行 国立大学法人琉球大学

千九〇三―〇二一四

印刷 沖縄県中頭郡西原町字千原一番地
株式会社 国際印刷

